

教育学研究科教員業績一覧

(2013年4月1日から2014年3月31日)

基礎教育学コース

金森 修 (教授)

〈分担執筆論文〉

- 1) 金森修 (単著) 「『人間の尊厳』は解体すべき概念か——動物・理性・霊魂」, 小松美彦『生を肯定する』第四章, 青土社, 2013年8月20日, pp.179-206.

〈雑誌論文〉

- 1) 金森修 (単著) 「認識論とその外部——汚染と交歓」, 日本哲学会編『哲学』第64号, 2013年4月1日, pp.25-41.
- 2) 金森修 (単著) 「3. 11の科学思想史的含意」, サントリー文化財団・アステイオン編集委員会編『アステイオン』第78号, 2013年5月23日, pp.79-94.
- 3) 金森修 (単著) 「専門知と教養知の境域」, 『近代教育フォーラム』第22号, 2013年9月14日, pp.135-149.
- 4) 金森修 (単著) 「〈変質した科学〉の時代の宗教」, 『宗教研究』第87巻, 377第2輯, 2013年9月30日, pp.81-106.
- 5) Osamu Kanamori (単著) “Une lecture matérielle d'un poète japonais: Kenji Miyazawa”, *Revue de Synthèse*, Tome 134, 6e série, No.3, 2013, septembre 2013, pp.373-389.

〈参考論文・エッセイ〉

- 1) 「日本の科学思想史を俯瞰した先駆的作品」, 『場』Utpada, No. 46, 辻哲夫『日本の科学思想』刊行に寄せて, こぶし文庫, 2013年5月30日, pp.3-4.
- 2) 項目「動物機械論」、「動物霊魂論」、「生氣論」, 上田恵介他編『行動生物学辞典』東京化学同人, 2013年11月22日
- 3) “Rapport sur la demande d'une habilitation a diriger des recherches concernant le dossier d'Arnaud Francois”, Service des admissions et des etudes, Bureau des doctorants et HDR, Ecole normale supérieure, le 5 decembre 2013.
- 4) 「エピステモロジーの未来のために」, 『現代思想』vol.42-1, 2014年1月1日, pp.130-132.

- 5) “Commentary: Before the Dawn of Ethics in Synthetic Biology”, Akira Akabayashi ed., *The Future of Bioethics*, Oxford, Oxford University Press, 2014, pp.350-353.

- 6) 「高木仁三郎『市民の科学』解説」, 高木仁三郎『市民の科学』講談社学術文庫, 2014年3月10日, pp.250-257.

- 7) 「鼎談：人文科学は滅びるのか？」(島藺進＋小松美彦＋金森修), 『週刊読書人』第3031号, 2014年3月14日

〈書評〉

- 1) 「生命軽視のエートスと、科学者の加担」, 『週刊読書人』第2984号, 2013年4月5日
- 2) 「『实在』をめぐる物理学者の論争」, 『日本経済新聞』, 2013年5月5日
- 3) 「2013年上半期読書アンケート」, 『図書新聞』第3119号, 2013年7月20日
- 4) 「2013年上半期三冊」, 『週刊読書人』第2999号, 2013年7月26日
- 5) 「包括的な理想社会論」, 『週刊読書人』第3008号, 2013年9月27日
- 6) 「巨大な加速器への期待感示す」, 『日本経済新聞』, 2013年12月15日
- 7) 「2013年下半期読書アンケート」, 『図書新聞』第3139号, 2013年12月21日
- 8) 「2013年読書アンケート」, 『みすず』第623号, 2014年2月1日, pp.17-18.
- 9) 「『可愛い』動物が映す人類の未来」, 『日本経済新聞』2014年3月2日
- 10) 「超越性の忘却がもたらす破滅の道」, 『週刊読書人』第3030号, 2014年3月7日
- 11) 「加速する技術で進化する人と社会」, 『日本経済新聞』2014年3月30日

〈学会発表等〉

- 1) 「認識論とその外部——汚染と交歓」, 日本哲学会, 第72回大会, シンポジウム「知識・価値・社会——認識論を問い直す」での発表, お茶の水女子大学, 2013年5月11日
- 2) 「〈衰退する社会〉の中の社会倫理」, 東京大学公開講座『変わる／変える20年後の世界：20年後

- の超高齢社会』, 東京大学, 2013年9月29日
- 3) 「〈反自然性〉の定位としての尊厳」, シンポジウム『いまの時代, 尊厳を問い直す』日本生命倫理学会, 第25回年次大会, 東京大学, 2013年12月1日
- 4) 「一九世紀ヨーロッパにおける人工世界の表象——シャルル・バルバラの『ウィティントン少佐』を中心に」, 『科学の知と文学・芸術の想像力——ドイツ語圏世紀転換期の文化についての総合的研究』主催, 東京大学教養学部, 2014年3月17日

川 本 隆 史 (教授)

〈論文〉

- 川本隆史 (単著), 「『冒険』をはぐくみ育てて一八年——パーソナル (かつエシカル?) な手記」, 『季刊創文』第12号, 創文社, 2013年, pp.4-6.

〈その他の業績〉

- 川本隆史 (講演), 「脱中心化と脱集計化——ヒロシマで正義とケアを編み直すために」, PP研オルタキャンパス「原発と原爆」第10回, 2013年7月13日 (ピープルズ・プラン研究所)。
- 川本隆史 (招待講演), 「イエズス会教育と《社会的なるもの》——社会教説・社会倫理・社会正義」, 2013年度イエズス会四校合同倫理宗教研修会, 2013年8月2日 (イエズス会日本管区本部)。
- 川本隆史 (招待講演), 「〈社会〉と〈倫理〉の学びほぐし——公民科教育と倫理学研究のアーティキュレーションを通じて」, 都倫研平成25 (2013) 年度第二回研究例会, 2013年11月22日 (都立国分寺高等学校)。

小 玉 重 夫 (教授)

〈著書〉

- 小玉重夫 (単著) 『学力幻想』筑摩書房, 2013年5月, 223頁
- 小玉重夫 (単著) 『難民と市民の間で——ハンナ・アレント『人間の条件』を読み直す』現代書館, 2013年10月, 215頁

〈雑誌論文〉

- 小玉重夫 (単著) 「政治と向き合う主権者教育」『教職研修』第488号, 2013年4月1日, 教育開発研究所, pp.11-13
- 小玉重夫 (単著) 「『国家と教育』における「政治的なもの」の位置——教育に政治を再導入する

ために——」教育哲学会『教育哲学研究』第107号, 2013年5月, pp.42-48

小玉重夫 (単著) 「シティズンシップ教育の可能性」『月刊 高校教育』第47巻第2号, 学事出版, 2014年2月, pp.34-37

小玉重夫 (単著) 「シティズンシップ教育とは? ——自立した大人になるために」『The Seinen』2014年春号, 財団法人日本青年館, 2014年3月, pp.9-11

〈学会発表〉

Shigeo Kodama “Citizenship Education in Japan: Focusing on the Context of Multipolar World in the Post-Cold War Era”, 9th CitizED International Conference in Tokyo, Japan 2013 Symposium: Comparative Approach on Citizenship Education: East and West, 2013.7.15.

小玉重夫 「教育・身体・ポリティクス」招待講演, 日本スポーツとジェンダー学会第12回大会, 2013年7月14日, 京都教育大学

小玉重夫 「政治教育と教育政治学」日本教育学会第72回大会 (一橋大学) ラウンドテーブル「教育政治学の可能性を探る」2013. 8. 28.

小玉重夫 「〈語ること〉と〈聞くこと〉のあいだ——戦後生活指導運動史への一視点として」日本教育学会第72回大会 (一橋大学) 「特別課題研究 戦後教育学の遺産の記録——担い手への聞き書き調査を中心に」2013. 8. 30.

小玉重夫 「原発事故後の学校と市民の連携について——文京区での試みから——」日本生活指導学会第31回大会 (和歌山大学) 「課題研究B 原発事故後の知と学び」, 2013. 9. 7.

Shigeo Kodama “Citizenship Education in Japan—Focusing on the Restructuration of Educational Governance in the Post-Cold War Era”, International Workshop organized by the research unit of Japanese Studies at the University of Leuven, the Leuven Centre for Global Governance Studies and the InBev-Baillet Latour EU-China Chair, Changing Civil Society and Governance: Perspectives from Europe and Japan, 2014. 3. 21.

〈その他〉

小玉重夫 (単著) 「千葉雅也氏講演会「部分的な無関心について」についての報告」東京大学大学院教育学研究科基礎教育学研究室『研究室紀要』第39号, 2013年9月, pp.153-155

小玉重夫 (単著) 「書評『ペダゴジーの社会学——パースティン理論とその射程』(久富善之・小澤浩

明・山田哲也・松田洋介・編，学文社，2013年）
教育科学研究会『教育』815号，国土社，2013年
12月，pp.116-117

田 中 智 志（教授）

〈著書〉

田中智志（共監修），『教育相談』（橋本美保との共
監修，羽田紘一編著）一藝社，2013年5月，総頁
数200.

田中智志（共監修），『特別活動論』（橋本美保との
共監修，犬塚文雄編著）一藝社，2013年8月，総
頁数208.

田中智志（共監修）『教育課程論』（橋本美保との共
監修，山内紀幸編著）一藝社，2013年9月，総頁
数224.

田中智志（共編著・共監修），『教育の理念・歴史』（橋
本美保との共編著・共監修）一藝社，2013年10月，
総頁数211.

田中智志（共著），『音楽の力を信じて——「音楽教
育ヴァン」からのメッセージ』（佐藤学，河合隼
雄，野村萬斎，和田誠，谷川俊太郎，板東玉三郎，
佐伯胖と共著）教育芸術社，2014年1月，総頁数
100.

田中智志（共監修），『生徒指導・進路指導』（橋本
美保との共監修，林尚示編著）一藝社，2014年2
月，総頁数208.

田中智志（共監修），『教育心理学』（橋本美保との
共監修，遠藤司編著）一藝社，2014年3月，総頁
数212.

田中智志（共監修），『教職概論』（橋本美保との共
監修，高橋勝編著）一藝社，2014年3月，総頁数
216.

田中智志（共監修），『教育方法論』（橋本美保との
共監修，広石英紀編著）一藝社，2014年3月，総
頁数220.

〈雑誌論文〉

田中智志（単著），「書評 森田裕之著『ドゥルー
ズーガタリのシステム論と教育学』」，『教育哲
学研究』第107号，教育哲学会編，2013年5月，
pp.247-252.

田中智志（単著），「共鳴共振する存在——ハイデ
ガー／ティリッヒのカイロス」，『研究室紀要』，
第39号，東京大学大学院教育学研究科基礎教育学
研究室編，2013年7月，pp.1-10.

田中智志（単著），「大正新教育の思想史へ——躍動

する生命の思想」，『近代教育フォーラム』第22号，
教育思想史学会編，2013年9月，pp.91-100.

田中智志（単著），「主体的な学びとは何か」，『京都
大学高等教育研究』第19号，京都大学高等教育研
究開発推進センター編，2013年12月，pp.136-141.

田中智志（単著），「多面的・総合的な評価の前提
——「人物本位の評価」？」，『教職研修』，2014
年2月号（第498号），教育開発研究所編，2014年
2月，pp.90-92.

田中智志（単著），「教育再生実行会議の大学入試改
革案について——主体性と有用性」，『人間と教
育』第81号，民主教育研究所編，旬報社，2014年
3月，pp.68-75.

比較教育社会学コース

恒 吉 僚 子（教授）

〈著書・分担執筆〉

Ryoko Tsuneyoshi（単著）“Communicative English in Japan
and ‘Native Speakers of English’,” in *Native-Speakerism
in Japan: Intergroup Dynamics in Foreign Language
Education*, edited by Stephanie Ann Houghton and
Damian J. Rivers. Bristol, UK: Multilingual Matters, 2013,
pp. 119-131. 総頁数 285.

Ryoko Tsuneyoshi（単著）“Junior High School Entrance
Examinations in Metropolitan Tokyo: The Advantages
and Costs of Privilege”, in *Japanese Education in an Era
of Globalization: Culture, Politics, and Equity*, edited
by Gary DeCoker and Christopher Bjork. New York:
Teachers College Press, 2013, pp.164-182. 総頁数 206.

〈雑誌論文〉

Ryoko Tsuneyoshi（単著）“Models of Schooling in the
Global Age: The Case of Japan.” *Revue Internationale
d’Education de Sèvres*, le Centre international d’études
pédagogiques (CIEP), online, [http://ries.revues.
org/?lang=en](http://ries.revues.org/?lang=en), 2014, June.

〈発表〉

2013年9月 “Images of the Other in Korean and Japanese
Secondary School History Textbooks,” Ryoko Tsuneyoshi
and Seulbi Lee, East Asian Images of Japan (International
Symposium), Kyushu University, Sept. 6, 2013. Convened
jointly by the Department of Education, Kyushu University
Institute of Education, and University of London,
Birkbeck College. 招待.

2013年11月 第10回年次大会，国際行動学会（「異
文化間で対等なコミュニケーションは可能か？」，

「教育の場における『日本型』コミュニケーション・パターンの継承と克服—英語によるグローバルリーダー育成講義を手がかりに」名古屋。基調講演。

2013年11月 “The Structuring of Character Education: Tokkatsu in Japan: Some Images,” International Conference on Teacher Education in the Muslim World, Redesigning Pedagogy: Transformative Value-Based Education, organized by the International Islamic University Malaysia, Institute of Education, November 13th, 2013. 基調講演。

“The Japanese and American Models of Schooling,” presentation at the Institute of Education, International Islamic University Malaysia, November 15th, 2013. 招待。

中 村 高 康 (教授)

〈著書〉

中村高康 (著) 「日本社会における『間断のない移行』の特質と現状」溝上慎一・松下佳代編『高校・大学から仕事へのトランジション』ナカニシヤ出版, 2014, pp.43-61.

〈雑誌論文〉

中村高康 (単著), 「混合研究法の基本的理解と現状評価」社会調査協会編『社会と調査』第11号, 2013, pp.5-11.

橋 本 鉦 市 (教授)

〈雑誌論文〉

橋本鉦市・丸山和昭「高等教育研究の知識変容とネットワーク—関連3学会の比較を通して—」『高等教育研究』第15集, 183-201頁, 2013年5月。

丸山和昭・白旗希実子・橋本鉦市「『次世代専門職』のアクレディテーションと能力基準—米国のカイロプラクティック, 家族療法, 葬儀サービスを事例として—」『福島大学総合教育研究センター紀要』第15号, 2013年7月, 9-16頁。

橋本鉦市「高等教育政策の過程分析—日米における最近の研究動向を中心として—」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第53巻, 2014年3月, 67-79頁。

〈報告書〉

橋本鉦市・丸山和昭「高等教育3学会の比較分析結果」矢野眞和・濱中義隆・足立寛・橋本鉦市・丸山和昭「高等教育学会会員調査 (15周年記念事業)

—分析結果報告—」『日本高等教育学会十五周年記念誌』日本高等教育学会, 2013年5月, 24-30頁。

〈学会報告〉

丸山和昭・白旗希実子・橋本鉦市「『米国における職域横断型アクレディテーションの研究—Psychologist, Counselor, Social workerを事例として—』『東北教育学会』第71回大会, 2014年3月8日, 東北大学

本 田 由 紀 (教授)

〈著書〉

本田由紀 (単著), 「教育と仕事の再編成に向けて」, 宮本太郎編『生活保障の戦略』岩波書店, 2013, pp.25-59.

本田由紀 (単著), 「『学ぶこと』と『働くこと』の結び目をどうするか」, 岩波書店編集部編『これからどうする—未来のつくり方』岩波書店, 2013, pp.61-70.

〈雑誌論文〉

本田由紀 (単著), 「仕事に関する『強み』自認の規定要因と効果—「30代ワークスタイル調査」の分析より—」『RIETI Discussion Paper Series』14-J-014, 2014.

〈その他〉

本田由紀 (講演記録), 「激動する社会の中に生きる若者と仕事, 教育」, 『日本看護学教育学会誌』23(2), 2013, pp.27-36.

本田由紀 (講演記録), 「若者の雇用問題」, 『大原社会問題研究所雑誌』654号, 2013, pp.26-35.

本田由紀・香川めい・二宮祐 (学会発表), 「大学における社会学教育のレリバンス: 過少/過剰系統性の観点から」, 『日本教育社会学会大会発表要旨集録』第65集, 2013, pp.266-269.

本田由紀 (インターネット記事), 「『多様で丁寧な』を目指す大学入試改革とは?—何が必要で可能なのか』『Synodos』, 2013.

本田由紀 (インターネット記事), 「『どうなっているのか』と『どうすべきか』を一緒に考える』『Synodos』, 2013.

本田由紀 (インタビュー), 「ジョブ型採用を実現するため, 企業は採用基準の明確な提示と大学との対話が必要」, 『労政時報』3857号, 2013, pp.22-25.

上西充子・大内裕和・本田由紀・今野晴貴 (座談会), 「日本を食いつぶす妖怪は他にもいた?!」

ラックバイトとは?」, 『POSSE』 22号, 2014, pp.101-117.

本田由紀 (インタビュー), 「教育 ジョブ型雇用の活用で若者の暮らしを安定させる」『第三文明』 650号, 2014, pp.35-37.

仁 平 典 宏 (准教授)

〈著書〉

仁平典宏 (分担執筆), 『平成史【増補新版】』 (小熊英二編), 2013, 総頁数98.

仁平典宏 (分担執筆), 『シリーズ福祉社会学 3 協働性の福祉社会学——個人化社会の連帯』 (藤村正之編), 東京大学出版会, 2013, 総頁数24.

仁平典宏 (分担執筆), 『これからどうする——未来のつくり方』 (岩波書店編集部編), 岩波書店, 2013, 総頁数 4.

〈雑誌論文〉

仁平典宏 (単著), 「散乱するモデルの中にたえず——東日本大震災における複数のリスク構造」, 『理論と方法』 第54号, 数理社会学会編, 2013, pp. 247-268.

生涯学習基盤経営コース

影 浦 峽 (教授)

〈著書〉

Kyo Kageura and Takeshi Abekawa (分担), "The place of comparable corpora in providing terminological reference information to online translators: a strategic framework," Serge Sharoff, Pierre Zweigenbaum and Reinhard Rapp (eds.) *Building and Using Comparable Corpora*. Berlin: Springer, pp. 285-301, 2013.

影浦峽 (分担), 「言語・情報・知識」根本彰編『図書館情報学基礎』 (シリーズ図書館情報学第1巻), 1.1節, 2013.

Bogdan Babych, Anthony Hartley, Kyo Kageura, Martin Thomas and Masao Utiyama, "Scaffolding, capturing and preserving interactions in educating for collaborative translation," *The Making of a Translator: Multiple Perspectives*. 書林出版有限公司, 2013.

影浦峽 (分担), 「専門語彙研究の基本的視点と枠組み」韓美卿他編『일본어학과 일본어교육 3 어휘』 (日本語学と日本語教育第3巻「語彙」), pp. 235-246, 2013.

〈国際会議〉

Rei Miyata, Ryoko Adachi, Ulrich Apel, Iris Vogel,

Wolfgang Fanderl, Ryo Murayama, Koichi Takeuchi, Kyo Kageura, "The use of corpus evidence and human introspection to create idiom variations," *The Second Asia Pacific Corpus Linguistics Conference (APCLC 2014)*, 7-9 March 2014.

Ryoko Adachi, Koichi Takeuchi, Ryo Murayama, Wolfgang Fanderl, Rei Miyata, Iris Vogel, Ulrich Apel and Kyo Kageura, "Development and use of a platform for defining idiom variation rules," *The 5th International Language Learning Conference*. Penang, Malaysia, 11-13 November 2013. p. 1-19.

Midori Tatsumi, Rei Miyata, Anthony Hartley, Kyo Kageura and Hitoshi Isahara, "Towards acceptable quality machine translation without post-editing for municipal websites," *MT Summit XIV 2013 Workshop on Human-Centric Machine Translation and Evaluation*. 3 September 2013.

Koichi Sato, Koichi Takeuchi and Kyo Kageura, "Terminology-driven Augmentation of Bilingual Terminologies," *MT Summit XIV 2013*. 2-6 September 2013.

Kyo Kageura, Ryo Murayama, Rei Miyata, Koichi Takeuchi, Ulrich Apel, Wolfgang Fanderl, Iris Vogel, "Cooperation at its best: developing a platform for defining idiom variation rules," *Symposium: Beyond General Dictionaries - Translation Aids, Collocation Matching Tools and Specialized Lexica*. Tübingen, Germany, 21-22 June 2013.

〈国内学会〉

Anthony Hartley, 影浦峽, Martin Thomas' 内山将夫, 「共同翻訳を考慮した「翻訳教育用みんなの翻訳」システム～みんなの翻訳第4報～」言語処理学会第20回研究大会, 2014年3月18-20日。

竹内孔一, 白石貴大, Ulrich Apel, 宮田玲, 足立諒子, Wolfgang Fanderl, 村山遼, Iris Vogel, 影浦峽, 「簡単なイディオム異形規則の作成: プラットフォームと日本語の異形規則」言語処理学会第20回研究大会, 2014年3月18-20日。

宮田玲, 影浦峽, Anthony Hartley, 「自治体ウェブサイト文書の多言語展開を支援するシステム環境」言語処理学会第20回研究大会, 2014年3月18-20日。

Tony Hartley, Kyo Kageura, Martin Thomas and Masao Utiyama, "MNH-TT to support collaborative translator training," *The 14th Annual Conference on the Japan*

Association for Interpreting and Translation Studies.
Chiba, Japan, 7-8 September 2013.

〈招待講演〉

Tony Hartley, Kyo Kageura, Martin Thomas and Masao Utiyama, "MNH-TT to support collaborative translator training," The 2nd Workshop on Future Directions in Translation Research, Osaka, Japan, 8 October 2013.

Kyo Kageura, "On some issues of technical terms in translation: focusing on the gap between CL technologies and human translation activity," 3rd International Conference on Law, Language and Culture, Hangzhou, China, 31 May-2 June 2013.

〈社会活動〉

影浦峽『信頼の条件：原発事故をめぐることば』東京：岩波科学ライブラリー，2013。

根本 彰（教授）

〈著書〉

根本彰（編著），『図書館情報学基礎』（シリーズ図書館情報学1），東京大学出版会，2013，viii，265p.

根本彰（編著），『情報資源の社会制度と経営』（シリーズ図書館情報学3），東京大学出版会，2013，viii，286p.

根本彰（編著），『情報資源の組織化と提供』（岸田和明氏との共編），（シリーズ図書館情報学2），東京大学出版会，2013.viii，198p.

根本彰（単著），「1.4 図書館情報学の視点」，根本編『図書館情報学基礎』，上記，p.28-42.

根本彰（単著），「6章図書館情報学をつくる」，根本編『図書館情報学基礎』，上記，p.221-257.

根本彰（単著），「1章情報資源制度論の構造」，根本編『情報資源の社会制度と経営』，上記，p.1-45.

根本彰（単著），「4.1 国立図書館」，根本編『情報資源の社会制度と経営』，上記，p.141-157.

根本彰（単著），「5.1 図書館の諸相：専門図書館と施設図書館」，根本編『情報資源の社会制度と経営』，上記，p.215-228.

〈雑誌論文〉

根本彰（単著），「資料の蓄積，流通，電子化—図書館情報学の課題」，『UP』，2013年6月号，p.6-10.

根本彰（単著），「司書養成のあり方を問いつ返す」，『図書館雑誌』，Vol.107，No.9，2013年9月号，p.576-579.

根本彰（単著），「「場所としての図書館」再考」『現代の図書館』，Vol.51，No.2，2013，p.51-60.

根本彰（単著），（書評）『ラーニングコモンズ』，『IDE

現代の高等教育』，No.550，2013年5月号，p.66-67.
崔英姫・根本彰（共著），「高校生の卒業研究に関する事例分析—中高一貫校の執筆者の質問紙調査から—」，『生涯学習基盤経営研究』，第38号，2013年度，p.29-39.

根本彰（単著），（書評）『現代日本の図書館構想：戦後改革とその展開』，『日本図書館情報学会誌』，Vol.59，No.4，2013，p.157-158.

根本彰（単著），「2013年読書アンケート」，『みすず』，No.623，2014，p.25-26.

〈報告書〉

根本彰（足立幸子氏と共著），「フランス共和国調査報告」，『子どもの読書活動と人材育成に関する調査研究【外国調査ワーキンググループ】報告書』，国立青少年教育振興機構，2013，p.83-108.

根本彰（共著），『子どもの読書活動と人材育成に関する調査研究【地域・学校ワーキンググループ】報告書』，（グループリーダー），国立青少年教育振興機構，2013，130p.

根本彰（講演），「21世紀のカリキュラム展開と学校図書館職員養成」，『日本の学校図書館専門職員はどうあるべきか：論点整理と展望（LIPER3シンポジウム記録 2012年12月1日）』，東京大学大学院教育学研究科生涯学習基盤経営コース図書館情報学研究室，2013，p.19-30.

根本彰（共編），『神奈川県平塚市の生涯学習基盤—博物館，美術館，図書館—』，（新藤浩伸氏と共編），2013年度「生涯学習基盤調査実習」報告書，東京大学教育学部教育実践・政策学コース，2014，73p.

根本彰（共編），『公開研究会記録 中等教育における卒業研究カリキュラム—学校図書館サービスを視野に入れて—』，東京大学大学院教育学研究科生涯学習基盤経営コース図書館情報学研究室，2014，111p.

李 正 連（准教授）

〈著書〉

李正連（編著）『日本の社会教育・生涯学習—新しい時代に向けて—』（小林文人氏，伊藤長和氏との共編）大学教育出版，2013，総頁数274.

〈論文〉

李正連（単著）「韓国における教育福祉政策と実践動向—『教育福祉投資優先地域事業』を中心に—」『コミュニティ・ガバナンスと社会教育福祉—欧

- 米とアジアの比較研究—』(平成25年度科学研究費補助金基盤研究(A)研究成果報告書・その2(研究代表者:松田武雄)), 2013, pp.33-47.
- 李正連(単著)「日本の 취약집단을 위한 진로개발 정책(日本における脆弱集団のための進路開発政策)」『脆弱集団進路開発事例研究』韓国教育開発院, 2014, pp.316-361.(韓国語)
- 李正連(共著)「『終身教育法』修正后韓国終身教育振興政策的動向及特征」(王国輝氏との共著)『現代远程教育研究』総127期, 2014, pp.49-54.(中国語)
- 李正連(単著)「植民地期朝鮮における不就学児童と夜学—1930~40年代夜学経験者のオーラルヒストリーをもとに—」『日本統治下台湾・朝鮮の学校教育と周辺文化の研究』(平成23年度~平成25年度科学研究費補助金・基盤研究(B)研究成果報告書(研究代表者:佐藤由美)), 2014, pp.67-86.
- 李正連「韓国における社会教育と教育福祉」『コミュニティ・ガバナンスと社会教育福祉—欧米とアジアの比較研究』(平成25年度科学研究費補助金基盤研究(A)研究成果報告書・その3(研究代表者:松田武雄)), 2014, pp.22-27.
- 〈翻訳〉
- 李正連「マウル学校で芽吹くマウル共同体」(李揆仙)日本社会教育学会60周年記念国際シンポジウム資料集『持続可能な社会づくりと社会教育・成人教育—3・11後の日本社会からの発信—』2013, pp.109-118.
- 〈国際会議・招待講演等〉
- 李正連「植民地朝鮮における不就学児童と夜学」, 平成23年度~平成25年度科学研究費補助金・基盤研究(B)研究ワークショップ(研究代表者:佐藤由美), こども教育宝仙大学, 2013年11月9日.
- Jeongyun Lee, Social Education and Educational Welfare in South Korea, International Conference: Social Pedagogy in Europe, Asia & the US, Johannes Gutenberg-Universität Mainz, Germany, Nov. 27, 2013.
- 李正連「韓国における少子高齢化と生涯学習」豊四季台くるるセミナー『「学び」の社会をつくる~東大セミナー~』柏第六小学校, 2013年12月11日&東京大学高齢社会総合研究機構産学連携ジェロントロジー・ネットワーク全体会議, 東京大学福武ホール, 2014年1月10日.
- 〈その他〉
- 李正連「向陽台公民館」鶴ヶ丘4丁目(西)公民館」

- 東京大学大学院教育学研究科社会教育学・生涯学習論研究室内灘町社会教育調査チーム『地域密着型公民館の可能性—内灘町公民館調査報告—』, 2013, pp.75-81, 88-94.
- 李正連「〈座談会〉東アジア生涯学習における自治と共同」東京・沖縄・東アジア社会教育研究会(TOAFAC)『東アジア社会教育研究』No.18, 2013, pp.17-20.
- Jeongyun Lee, Seoul Stimulus Paper, Pascal International Exchanges(PIE), 2013. (<http://pie.pascalobservatory.org/pascalnow/blogentry/news/seoul-stimulus-paper>)

新 藤 浩 伸(講師)

〈著書〉

- 新藤浩伸, 胡子裕道, 杉浦ちなみ(編), 『社会教育研究全国集会地域文化分科会資料集(1971~2013)』, 地域文化研究会, 2013年8月, 総頁数601.

〈雑誌論文〉

- 新藤浩伸(単著, 査読あり), 「公共ホールにおけるアーカイブ活動の意義と課題」, 『文化政策研究』第7号, 日本文化政策学会, 2014年3月, pp.41-57.

〈学会発表〉

- SHINDO Hironobu, SHIMIZU Kakeru, SHIMIZU Daichi, Development of Curators' Attitudes towards Education Programs. Activating Inspiration & Creativity: The Tokyo International Symposium for Learning in Art, Science and Technology 2013年11月9日, 東京大学.

- 新藤浩伸, 山崎功「木村素衛の表現論と長野における社会教育実践」日本社会教育学会研究大会2013年9月28日, 東京学芸大学.

- SHINDO Hironobu, SHIMIZU Kakeru, Struggling Regional Museums in Japan: Towards Fourth-generation Museum for Sustainable Community, International Committee for Regional Museums(ICR) in ICOM(The International Council of Museums) General Conference 2013 2013年8月14日, Cidade das Artes in Rio de Janeiro.

- 新藤浩伸, 「公共ホールおよび公民館のアーカイブ活動の意義と課題」文化経済学会〈日本〉研究大会 2013年6月30日, 東京大学.

〈講演等〉

- 新藤 浩伸, 「公民館の可能性」西東京市田無公民館利用者懇談会, 2013年11月7日, 西東京市田無公民館.

新藤浩伸, 田村栄作「博物館への誘い〜ものと語り合うということ」豊四季台「学び」の社会をつくる〜東大セミナー〜, 2013年10月30日, 千葉県柏市立柏第六小学校。

新藤浩伸, 「ミュージアムの可能性ー触発しあう空間の創造ー」第10回博学連携フォーラム, 2013年10月25日, みのかも市民ミュージアム。

新藤浩伸, 「ミュージアムに行ってみよう」2013年度東京大学オープンキャンパス 教育学部模擬授業, 2013年8月8日, 東京大学教育学部。

〈報告書〉

新藤浩伸 (佐藤一子との共著), 「地域にねざす民衆文化創造と抵抗としての表現——北田耕也の民衆文化論——」科学研究費基盤研究C (研究代表者・佐藤一子) 中間報告書「ソーシャルキャピタルの再生にむけた地域学習の展開と地元学の創造に関する研究」中間報告書『戦後教育思想における「地域と教育」への問い——大田堯氏・北田耕也氏・藤岡貞彦氏インタビュー記録集——』2013年8月, pp.30-48。

新藤浩伸 (単著), 「室公民館」「大学公民館」『学習基盤社会研究・調査モノグラフ5 地域密着型公民館の可能性ー内灘町公民館調査報告ー』東京大学大学院教育学研究科社会教育学・生涯学習論研究室, 2013年8月, pp.43-49, 107-112。

〈その他の業績〉

新藤浩伸 (単著), 「常民大学調査をすすめる地域文化研究会」『社全協通信』第251号, 2014年3月, p.10。

新藤浩伸 (単著), 「都市のなかのつどいの場」『西東京市公民館だより』第154号, 2014年3月, p.4。

新藤浩伸 (単著), 「「言葉」に寄せて」『中央線』第70号, 2013年12月, pp.106-110。

新藤浩伸 (単著), 「国際博物館会議(ICOM)大会に参加して」『月刊社会教育』第57巻第12号, 2013年12月, 国土社, pp.48-49。

新藤浩伸 (単著), 「10周年記念集会に参加して①」『学会通信』第36号, 日本公民館学会, 2013年10月, p.4。

古 壕 典 洋 (特任助教)

〈雑誌論文〉

古壕典洋「初期遠隔教育論における“distance”の意義ー形態論から行為論への転換過程に注目して」『日本通信教育学会研究論集』2013, pp.1-14。

牧野篤・新藤浩伸・古壕典洋「生涯学習と社会を記述する視点ー飯田市公民館調査を題材に」『東

京大学大学院教育学研究科紀要』第52巻, 2013, pp.203-232。

〈書評〉

古壕典洋 “Moller, Leslie. & Huett, Jason B. (eds.) *The Next Generation of Distance Education: Unconstrained Learning*, Springer, 2012.”『日本通信教育学会研究論集』2013, pp.97-101。

〈報告書〉

東京大学大学院教育学研究科社会教育学・生涯学習論研究室内灘町社会教育調査チーム『地域密着型公民館の可能性ー内灘町公民館調査報告』(学習基盤社会研究・調査モノグラフ第5号) 2013, pp.10-22. pp.50-64. pp.101-106. pp.133-136。

松 山 鮎 子 (特任助教)

〈著書〉

1) 松山鮎子・牧野篤 (編著), 東京大学教育学部社会教育学研究室大槌町訪問チーム (著)『わたしの大槌物語ー東大生が紡ぐおばあちゃんの人生ー』, 東京大学大学院教育学研究科・社会教育学・生涯学習論研究室, 2014, 総頁数336。

2) 松山鮎子・牧野篤 (編著), 東京大学教育学部社会教育学研究室大槌町訪問チーム (著)『わたしが想う明日の大槌ー「わたしの大槌物語」を生きて』, 東京大学大学院教育学研究科・社会教育学・生涯学習論研究室, 2014, 総頁数117。

〈雑誌論文〉

1) 松山鮎子 (共著), 「子どもの貧困と対抗戦略に関する教育学的研究ー国際比較の視点からー」, 『早稲田教育評論』第28巻第1号, 早稲田大学教育総合研究所, 2014, pp.218-222。

大学経営・政策コース

小 方 直 幸 (教授)

〈著書〉

小方直幸 2013「大学の職業準備教育の系譜と行方」広田照幸・吉田文・小林傳司・上山隆大・濱中淳子編集『教育する大学』シリーズ大学第5巻, 岩波書店, 49-75頁。

〈雑誌論文〉

小方直幸 2013「国立大学の教員養成改革」『高等教育研究』第16集, 221-242頁。

〈その他〉

小方直幸 2013「職業教育の質保証と専門学校教育」『全国専修学校各種学校総連合会北関東信越

ブロック大会報告書』全専各連北関東信越ブロック、12-20頁。

小方直幸 2014「論説空間：就活から大学教育を見つめる」『東京大学新聞』。

山 本 清 (教授)

〈英文論文〉

The Effects of New Public Management on the Autonomy of Faculties in Japan 単著 2013.6. International Academic Conference: The Dean in The University of the Future (Saarbrücken, Germany)

Public works spending in fiscal austerity: from downsizing for fiscal health to revitalizing for economic growth? 単著 2013.9. 14th CIGAR Conference (Birmingham)

Different scenarios for accounting reform in Non-Anglophone contexts: The case of Japanese Local governments since the 1990s with M. Noguchi 2013.11. Accounting History Vol.18, No.4, pp.529-549

Re-designing agencies or de-agencification? The case of semi-autonomous public bodies In Japan 単著 2014.1. Dorothea Greiling et al.(eds.) Entrepreneurship in the public sector, Nomos, pp.27-36

〈和文論文〉

「財政健全化と基盤となる会計情報」単著 2013.4.『会計と監査』第64巻第4号 pp.30-35.

「自治体会計の制度統一を」単著 2013.5. 日本経済新聞「経済教室」2013年5月16日

「公会計制度改革の実態と課題（上）」単著 2013.7.『会計検査資料』第574号, pp.33-36.

「公会計制度改革の実態と課題（下）」単著 2013.8.『会計検査資料』第575号, pp.46-48.

「公共経営と会計の関係—国際比較の観点から—単著 2013.9.『公共経営の変容と会計学の機能』日本会計研究学会課題研究委員会中間報告第2章.

「大学経営・政策と財務・会計情報」単著 2014.3.『大学経営政策研究』第4号, pp.3-21.

福 留 東 土 (准教授)

〈雑誌論文〉

福留東土「アメリカの大学における理事会とガバナンス—ペンシルバニア州立大学の事例—」『KSU 高等教育研究』第3号, くらしき作陽大学高等教育研究センター, 2014年3月, 97-111頁。

〈報告書〉

福留東土「米国 I —訪問調査編—」『諸外国の大学の教学ガバナンスに関する調査研究—米国・英国・フランス—』文部科学省先導的大学改革推進委託事業最終報告書, 2013年7月, 9-28頁。

福留東土「アメリカの大学教授職」有本章(研究代表)『21世紀型アカデミック・プロフェッション展開の国際比較研究』科学研究費補助金研究成果報告書, 2014年3月, 193-200頁。

〈翻訳〉

レスター・グッドチャイルド著, 福留東土訳「米国における高等教育研究と高等教育学会—120年の展開—」日本高等教育学会編『高等教育研究』第16集, 2013年, 95-122頁。

〈書評〉

福留東土「藤本夕衣著『古典を失った大学—近代性の危機と教養の行方—』, 『大学論集』第45集, 広島大学高等教育研究開発センター, 2014年3月, 180-181頁。

〈学会発表〉

福留東土「アメリカの大学教師論からみた教育と研究」日本高等教育学会第16回大会・課題研究『大学教師とは何か—授業, 能力, 文化—』, 於広島大学, 2013年5月。

〈講演等〉

福留東土「研究・大学院教育と研究支援」立命館アジア太平洋大学職員研修会, 於立命館アジア太平洋大学, 2013年8月。

福留東土「学士課程教育の課題とは何か—米国との比較から考える—」広島大学高等教育研究開発センター・平成25年度高等教育公開セミナー, 於広島大学, 2013年8月。

両 角 亜希子 (准教授)

〈著書〉

両角亜希子「学生類型をベースに考える楽しい授業スタイル」清水亮・橋本勝編『学生と楽しむ大学教育—大学の学びを本物にするFDを求めて』ナカニシヤ出版, 2013年12月, 105-119頁, 総頁数382.

〈雑誌論文〉

両角亜希子(単著), 「私立大学の財政・財務—マクロ・ミクロの両面から」『大学財政・財務の動向と課題』広島大学高等教育研究開発センター, 2013, pp.49-71.

両角亜希子(単著), 「理論と実践を組み合わせ, チームで教育する(事例: 産業能率大学)」『カレッジ

- マネジメント』リクルート, 180号, 2013, pp. 28-31.
- 両角亜希子「大学院卒業生のキャリアパス」『IDE 現代の高等教育』No.552, 2013, pp.57-63.
- 両角亜希子 (単著), 「教学ガバナンスの日本固有の特徴」『Between』No.251, 2013年, 7頁.
- 両角亜希子 (単著), 「学生の声を聞き, 改善に活かすことを徹底 (事例: 武庫川女子大学)」『カレッジマネジメント』リクルート, 182号, 2013年 9-10月, pp. 48-51.
- 両角亜希子 (単著), 「実学教育の伝統を世界へ (事例: 中央大学)」『カレッジマネジメント』183号, 2013年11-12月, pp. 16-19.
- 両角亜希子 (単著), 指定討論「高大接続の視点から」「社会に生きる学力形成をめざしたカリキュラム・イノベーション—新たなカリキュラム像の提案に向けて—」『年報』東京大学大学院教育学研究科附属学校教育高度化センター, 2013, pp. 36-40.
- 両角亜希子 (単著), 「大学教員の意思決定参加に対する現状と将来像」, 『大学論集』広島大学, 45, 2014, pp. 65-79.
- 両角亜希子 (単著), 「少子化と大学経営の展望 (特集 少子化と日本の教育の展望)」『教育展望』教育調査研究所, 60(1), 2014, pp. 39-43.
- 両角亜希子 (単著), 「『入試制度に関する学長調査』結果報告 (特集 入試は受験生へのメッセージ)」, 『カレッジマネジメント』リクルート, 2014年 1-2月, 184号, pp. 6-21.
- 両角亜希子 (単著), 「夏季私学経営者特別講座講演要旨 私立大学におけるマネジメント改革: アンケート調査等の分析から」, 『私学経営』私学経営研究会 (467), 2014, pp. 64-75.

教育心理学コース

市川伸一 (教授)

〈著書〉

- 市川伸一 (2013), 『「教えて考えさせる授業」の挑戦—深い理解と学ぶ意欲を育む授業デザイン』, 明治図書, 編著, 総頁数 180.
- 市川伸一 (2013), 『勉強法の科学—心理学から学習を探る—』, 岩波書店, 単著, 総頁数 130.
- 市川伸一 (2014) 『学力と学習支援の心理学』, 放送大学出版会, 編著, 総頁数 220.

〈研究報告, 学会発表等〉

- 瀬尾美紀子・赤坂康輔・植阪友理・市川伸一 (2013).

- 学習をふり返るカー「教訓帰納」を促す中学校教育プログラムの開発と実践— 植阪友理・Emmanuel Manalo (編) 「心理学からみた効果的な学び方の理解と支援—学習方略プロジェクトH24年度の研究成果—」Working Papers, Vol. 2. Pp.29-38.
- 深谷達史・田中瑛津子・植阪友理・田中麻紗子・市川伸一 (2013) 学習者相互の教え合いを促す高校での学習法講座の実践. 植阪友理・Emmanuel Manalo (編) 「心理学からみた効果的な学び方の理解と支援—学習方略プロジェクトH24年度の研究成果—」Working Papers, Vol. 2. pp.52-64.
- 植阪友理・深谷達史・篠ヶ谷圭太・市川伸一 (2013). 高校における教え合い講座の実践(1)—教え合いの質が高まらない理由—. 日本教育心理学会第55回総会, 法政大学
- 深谷達史・田中瑛津子・植阪友理・市川伸一 (2013). 高校における教え合い講座の実践(2)—実践の改善および学習方略への転移効果の検討— (ポスター発表) 日本教育心理学会第55回総会, 法政大学

遠藤利彦 (教授)

〈著書〉

- 遠藤利彦 (2013). 「情の理」論: 情動の合理性をめぐる心理学的考究. 東京大学出版会.
- 遠藤利彦 (2013). 双生児研究の二つの顔: 心理学的に見る「双生児による研究」と「双生児の研究」. 東京大学教育学部附属中等教育学校 (編), ふたごの教育: 双生児研究から見える個性 (pp.197-236). 東京大学出版会.
- 日本認知心理学会 (編)・遠藤利彦 (「感情」領域編集). (2013). 認知心理学ハンドブック. 有斐閣. 〈個人担当章〉「感情と進化・文化」・「感情の両刃性」・「感情の発達」・「アタッチメントと対人的情報処理」.

〈学術誌論文〉

- 遠藤利彦 (2013). 基礎と実践の間を架橋する. 発達心理学研究, 24, 504-506.
- 遠藤利彦 (2013). 「質」と「量」を組み合わせる. 臨床心理学, 13, 360-364.
- 遠藤利彦 (2013). たかがアタッチメント, されどアタッチメント: 高橋恵子論文に寄せて. 日本児童研究所 (監修), 児童心理学の進歩, 51, 263-267.
- 遠藤利彦 (2013). アタッチメントの発達・アタッチメントと発達. 小児内科, 48, 1377-1381.

〈報告書・紀要論文等〉

遠藤利彦・本島優子 (2013). 子どもの遊びにおける「想像上の仲間」とその発達の意義を探索. 中山隼雄科学技術文化財団平成24年度研究助成報告書.

遠藤利彦 (2013). 動機づけと社会性の間を情動をもって架橋する. 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要, 59, 27-52.

〈その他論文・記事等〉

遠藤利彦 (2013). 本のデジタル化と子どもの発達. 子どもと読書, 402, 2-6.

遠藤利彦 (2013). どの子ども大切に: 「時流に動ぜず, 「子どもの目線」で考えることこそが教育現場の役割. 子どもと生きる (東京民研発行), 313, 14-15.

遠藤利彦 (2013). 乳幼児期の「教育」を考えるー自律的で豊かな遊びが拓く学びの形ー. 全国私立保育園連盟・保育通信2013年5月号.

遠藤利彦 (2013). 子どもの遊びのすごさを再認識しよう. 全国私立保育園連盟・保育通信2013年6月号.

〈辞典・事典〉

子安増生・二宮克美 (監訳)・遠藤利彦 (領域編訳). (2014). 青年期発達心理学辞典. 丸善出版.

遠藤利彦 (2013). アタッチメント. 日本発達心理学会 (編), 発達心理学事典. 丸善出版.

遠藤利彦 (2013). アタッチメント理論. 藤永保他 (編), 最新心理学事典. 平凡社.

〈学会発表〉

遠藤利彦 現代進化心理学から見るアタッチメント (招待講演). 日本発達心理学会／文化比較・行動比較分科会 (白百合女子大学). 2013年4月20日.
石井佑可子・河本愛子・家島明彦・川本哲也・岡鼻千尋・遠藤利彦 課外活動は何を育てるのか, 何が課外活動につながるのか (自主シンポジウム). 指定討論. 日本教育心理学会第55回総会 (法政大学). 2013年8月17～19日.

上淵寿・小泉令三・野坂祐子・若山育代・利根川明子・遠藤利彦・松尾直博 教室における情動ー感情論的転回 (Affective Turn) の新しい展開ー (自主シンポジウム). 指定討論. 日本教育心理学会第55回総会 (法政大学). 2013年8月17～19日.

鹿子木康弘・篠原郁子・高橋英之・石原尚・浅野大喜・小林恵・遠藤利彦 赤ちゃん和他者の関わりを科学するー心理学・認知科学・構成論・リハビリテーションの視点からー (大会企画シンポジウム). 指定討論. 日本赤ちゃん学会第13回学術総

会 (九州大学). 2013年5月25・26日

遠藤利彦・松本学・石井佑可子・篠原郁子・本島優子 妊娠期からの母子長期縦断研究の課題と展望ー複眼的視座からの問い直しと予防的支援に向けてー (自主シンポジウム). 企画・指定討論. 日本心理学会第77回大会 (北海道医療大学) 2013年9月19～21日

遠藤利彦・本島優子・実藤和佳子・蒲谷慎介・石島このみ 感応する心ー情動的繋合が拓く子どもの初期発達ー (自主シンポジウム). 企画・指定討論. 日本発達心理学会第25回大会 (京都大学). 2014年3月21～23日.

柴山真琴・篠原郁子・菊池哲平・赤木和重・川田学・浜谷直人・遠藤利彦 『発達心理学研究』をもっとおもしろくするには? (編集委員会企画シンポジウム). 指定討論. 日本発達心理学会第25回大会 (京都大学). 2014年3月21～23日.

〈講演〉

遠藤利彦 招待講演: アタッチメントと子どもの社会性の発達. 平成25年度長崎県保育協会・保育研修会 (長崎県総合福祉センター・アルカス SASEBO). 2013年6月10・11日.

遠藤利彦 招待講演: 関係性と子どもの社会情動的発達: アタッチメント理論から見る自己制御. 新学術領域「精神機能の自己制御理解にもとづく思春期の人間形成支援学」若手研究会 (湘南国際村センター). 2013年7月13日.

遠藤利彦 招待講演: いじめの芽はどこから生えてくるの?: 共感する心・自制する心: 映し出しとストレス予防接種の大切さ. 第3回・茅ヶ崎・響きあい教育シンポジウム (茅ヶ崎市役所コミュニティホール). 2013年7月29日.

遠藤利彦 招待講演: アタッチメントと社会性の発達. 平成25年度千葉・家庭裁判所研修会 (千葉地裁). 2013年10月23日.

遠藤利彦 招待講演: 子育て・子育ての基本について考える: アタッチメントと子どもの社会性の発達. 平成25年度鹿児島県児童福祉施設職員並びに子育て関係者合同研修会 (ウェルビューかごしま). 2013年10月25日.

遠藤利彦 招待講演: アタッチメントと社会性の発達: 子の引渡しの強制執行に関連づけて. 平成25年度東京地方裁判所・研修会 (東京地裁). 2013年10月31日.

遠藤利彦 招待講演: ここまで見えた乳児のち・

- か・ら. 平成25年度平戸市保育会全体研修会 (平戸文化センター). 2013年11月17日.
- 遠藤利彦 招待講演: 発達臨床的視座から見るアタッチメント: 子どもの種々の問題と支援との関連も含め. 平成25年度神奈川県児童相談所研修会 (鎌倉児相). 2013年12月25日.
- 遠藤利彦 招待講演: 最新研究から学ぶ新しい赤ちゃん像と保育者の役割—発達心理学の立場から—. 第39回保育総合研修会 (神戸ANAクラウンプラザホテル). 2014年1月30日.
- 遠藤利彦 招待講演: 情と理: 「情に対する理」から「情に潜んで在る理」へ. 京都フォーラム講演会 (大阪駅前第三ビル). 2014年1月31日.
- 遠藤利彦 招待講演: 社会的養護児童の初期発達: アタッチメント理論の視座から考える. 日本臨床心理士定例研修会・第3回社会的養護専門研修会 (大阪科学技術センターOSTEC). 2014年2月8日.
- 遠藤利彦 招待講演: 虐待の心理—子育ての喜びと葛藤のはざままで—. 茅ヶ崎市教育講演会 (茅ヶ崎市松林公民館講義室). 2014年2月9日.
- 遠藤利彦 招待講演: アタッチメントと子どもの社会情緒的発達. 日本発達協会・2014 春季セミナー「不安や緊張が高い子への理解と支援」(有明TFTビル). 2014年2月23日.

岡田 猛 (教授)

〈雑誌論文〉

1. 杉本覚・岡田猛 (2013). 美術館におけるワークショップスタッフ初心者の認識の変化—東京都現代美術館ワークショップ“ボディー・アクション”への参加を通して—美術科教育学会誌「美術教育学」, 34, 261-275.
2. 清水大地・岡田猛 (2013). ストリートダンスにおける即興的創造過程 認知科学, 20(4), 421-438.
3. 小澤基弘・岡田猛・八桁健 (2013). 教員養成学部の絵画教育における省察の実践に関する研究 II: 授業におけるドローイングを介した対話と表現の継時的変遷の分析から 大学美術教育学会誌, 45, 151-158.

〈国際学会, 国際シンポジウム発表〉

4. Ishiguro, C. & Okada, T. (2013). How can an art course in photography inspire students' artistic creativity?. The 35th Annual Meeting of the Cognitive Science Society. Berlin, Germany, 2013
5. Takagi, K., Okada, T., Yokochi, S. (2013).

Formation of an art concept: How is visual information from photography utilized by an artist in concept formation?. The 35th Annual Meeting of the Cognitive Science Society. Berlin, Germany, 2013

6. Shimizu, D., & Okada, T. (2013). Physical Skill and Idea Interaction in the Creation of New Dance Movements. The 35th Annual Meeting of the Cognitive Science Society, Berlin, Germany, 2013
7. Nomura, R., & Okada, T. (2013). Temporal coordination patterns of performer and audience in vaudeville settings. The 35th Annual Meeting of the Cognitive Science Society, Berlin, Germany, 2013
8. Okada, T., Takagi, K., Yokochi, S. (2013). Analogy in a contemporary artist's concept formation. Third International Conference on Analogy. Dijon, FRANCE, 2013
9. Okada, T. (2013). How Artists and Students are Inspired to Create Innovative Work. Paper presentation at Activating Inspiration & Creativity: Tokyo International Symposium for Informal Learning in Art, Science & Technology, Tokyo, 2013, 11, 9-10.
10. Nomura, R., & Okada, T. (2013). Visualizing Collective-Continuous Measurement of Emotion. Poster presentation at Activating Inspiration & Creativity: Tokyo International Symposium for Informal Learning in Art, Science & Technology, Tokyo, 2013, 11, 9-10.
11. Nakano, Y. & Okada, T., (2013). The Process of Creating Choreography in Contemporary Dance. Poster presentation at Activating Inspiration & Creativity: Tokyo International Symposium for Informal Learning in Art, Science & Technology, Tokyo, 2013, 11, 9-10.
12. Takagi, K., Okada, T., & Yokochi, S., (2013). Formation of an art concept: How is visual information from photography utilized by an artist in concept formation? Poster presentation at Activating Inspiration & Creativity: Tokyo International Symposium for Informal Learning in Art, Science & Technology, Tokyo, 2013, 11, 9-10.
13. Ishiguro, C., & Okada, T. (2013). Inspiring students' artistic creativity in a photography course. Poster presentation at Activating Inspiration & Creativity: Tokyo International Symposium for Informal Learning in Art, Science & Technology, Tokyo, 2013, 11, 9-10.

14. Nakakoji, K., Okada, T., Kageura, K., Yamamoto, Y., Shindo, H., Orimo, K., Shimizu, D., Kimura, K., & Kawashima, T., (2013). Manigraphy: Prototyping of inspirational communication probe. Poster presentation at Activating Inspiration & Creativity: Tokyo International Symposium for Informal Learning in Art, Science & Technology, Tokyo, 2013, 11, 9-10.
15. Yokochi, S., & Okada, T., (2013). Creative Motivation in the Arts. Poster presentation at Activating Inspiration & Creativity: Tokyo International Symposium for Informal Learning in Art, Science & Technology, Tokyo, 2013, 11, 9-10.
16. Miyata, M., & Okada, T., (2013). Can a "Science Café" be a place of inquiry for researchers? Poster presentation at Activating Inspiration & Creativity: Tokyo International Symposium for Informal Learning in Art, Science & Technology, Tokyo, 2013, 11, 9-10.

佐々木 正 人 (教授)

〈著書〉

佐々木正人編著 『身体 環境とのエンカウンター』
2013年 東京大学出版会 283頁

〈学会誌論文〉

- 青山慶・佐々木正人・鈴木健太郎 2013 他者の意図理解の発達を支える環境の記述—母子によって繰り返される積み木遊びに注目して 認知科学 21 (1) 125-140
- 伊藤万利子・三嶋博之・佐々木正人 2014 けん玉熟練者における視覚情報の探索過程 認知科学 21 (3) 325-343

〈雑誌等〉

佐々木正人 2013 マクロをもっとふくらませる—ギブソン『生態学的知覚システム』の転回 東大出版会UP

〈学術講演〉

第3回生態心理学とリハビリテーションの融合研究会・特別講演 『リハビリテーションと環境』和歌山県立医科大学講堂 2014年3月22日

南風原 朝 和 (教授)

〈雑誌論文〉

南風原朝和 (単著), 「分散分析を基礎から見直す—有意性検定による「推測革命」と近年の「統計改革」—」, 『基礎心理学研究』第32巻第2号, 日本基礎心理学会, 2014, pp.217-222.

〈事典〉

南風原朝和 (分担執筆), 「統計的推論」, 藤永保 (監修) 『最新心理学事典』, 平凡社, 2013, pp.551-555.

〈学会発表等〉

- 南風原朝和 (フォーラム講演), 「分散分析を基礎から見直す」, 日本基礎心理学会2013年度第1回基礎心理学フォーラム, 2013.
- 南風原朝和 (ワークショップ話題提供), 「統計的検定への過度の依拠からの脱却を目指して—効果量や信頼区間などの活用のある方—」, 日本社会心理学会第54回大会, 2013.

針 生 悦 子 (准教授)

〈著書〉

- 針生悦子「概念と語彙」(pp. 4-5) 発達心理学会 (編) 『発達心理学事典』東京: 丸善出版. 2013年5月.
- 針生悦子「言語発達」(pp.166-170) 藤永保 (監), 内田伸子・繁柝算男・杉山憲司 (編) 『最新心理学事典』, 東京: 平凡社. 2013年12月.
- 針生悦子「認知発達の理論」(pp.338-339) 日本認知心理学会 (編) 『認知心理学ハンドブック』東京: 有斐閣. 2013年12月.
- 今井むつみ・針生悦子『言葉をおぼえるしくみ』東京: ちくま書房, 総頁数409. 2014年2月.

〈学術論文〉

- Jiang, L. & Haryu, E., Chinese-speaking adults' understanding of argument structure. In M. Knauff, M. Pauen, N. Sebanz & I. Wachsmuth (Eds.), *Proceeding of the 35th Annual Conference of the Cognitive Science Society* (pp. 675-679). Austin TX: Cognitive Science Society. 2013年8月.
- 針生悦子「擬音語の感覚ができるまで」, SIGLAL (日本認知科学会「学習と対話」研究分科会) 2013-1, pp.3-9. 2013年9月.
- Ohtake, Y. & Haryu, E., Investigation of the process underpinning vowel-size correspondence. *Japanese Psychological Research*, 55(4), pp.390-399, 2013年10月.
- 針生悦子・梶川祥世, 「乳児における助詞利用の発達: 単語を切り出し分類する手がかりとして」, 『信学技報』113(426), pp.61-66, 2014年2月.
- 大竹裕香・針生悦子, 「乳児における名詞の意味推論の発達」, 『信学技報』113(426), pp.55-60. 2014年2月.

〈学会発表〉

Ohtake, Y. & Haryu, E., Infants' mapping of a novel

word presented in synchrony with object's motion. *The Biennial Meeting of the Society for Research in Child Development*. Seattle, U.S.A. 2013年 4月.

Yamamoto, H. & Haryu, E., Japanese children's learning of homophones with different accentual patterns. *The Biennial Meeting of the Society for Research in Child Development*. Seattle, U.S.A. 2013年 4月.

針生悦子「“語彙爆発” 前夜：単語の学習を支える文法の学習」, 日本心理学会第77回大会, 札幌. 2013年 9月.

大竹裕香・針生悦子「16カ月児におけるモノの動きと同期するラベルの解釈：文法的手がかりのもとでのマッピング」, 日本心理学会第77回大会, 札幌. 2013年 9月.

實藤和佳子・針生悦子「誤信念理解への発達の経路を探る：幼児における物理的／心理的因果性の理解から」, 日本発達心理学会第25回大会, 京都. 2014年 3月.

大竹裕香・針生悦子「乳児の語意推論における文法枠の役割」, 日本発達心理学会第25回大会, 京都. 2014年 3月.

植 阪 友 理 (助教)

〈書籍〉

植阪友理 (2014)「数学的問題解決における図表活用 の支援」東京：風間書房 (単著)

植阪友理 (2014)「個別学習相談による診断と支援」市川伸一 (編)『学力と学習の心理学』東京：放送大学出版会, pp. 65-80. (共著)

植阪友理 (2013)「教育心理学一学びにおけるつまずきと向かい合う」藤田哲也 (編)『絶対役立つ教養の心理学 展開編—人生をさらに有意義にすごすために—』京都：ミネルヴァ書房 pp.11-36. (共著)

植阪友理 (2013)「教授・学習研究」日本認知心理学会 (編)『認知心理学ハンドブック』東京 有斐閣 pp.356-357 (共著)

植阪友理 (2013)「学習観・学習方略」日本認知心理学会 (編)『認知心理学ハンドブック』東京 有斐閣 pp.358-359 (共著)

〈査読つき学術論文〉

Manalo, E., Uesaka, Y., Pérez-Kriz, S., Kato, M., & Fukaya, T. (2013). Science and engineering students' use of diagrams during note taking versus explanation. *Educational Studies*, 39, 118-123.

Manalo, E., Uesaka, Y., & Sekitani, K. (2013). Using mnemonic images and explicit sound contrasting to help Japanese children learn English alphabet sounds. *Journal of Applied Research in Memory and Cognition*, 2, 216-221.

植阪友理 (2013) 創作と鑑賞の一体化を取り入れた俳句指導—国語における新たな単元構成の提案—教育心理学研究, 61, 398-411.

〈国際学会発表：査読つき〉

Uesaka, Y., Manalo, E., & Tanaka, M. (2013). Creating Learning Situations to Make Diagram Use Inevitable: Focusing on Diagrams. Paper presented at the 15th Biennial Conference of the European Association for Research in Learning and Instruction (EARLI), August 2013, Munich, Germany.

Manalo, E., Uesaka, Y., & Tanaka, M. (2013). What students represent in text and diagrams: Variations according to purpose, task, and language. Paper presented at the 15th Biennial Conference of the European Association for Research in Learning and Instruction (EARLI), August 2013, Munich, Germany.

Fukaya, T., & Uesaka, Y. (2013) Assessing pedagogical content knowledge utilized in an educational setting: Investigation of a tutoring scenario method. Poster presented at the 54th Annual Meeting of the Psychonomic Society, Ontario, Canada, November 2013.

〈査読なし論文〉

植阪友理 (2013)「失敗はお宝」—失敗を生かす学習方法と発想を身につける—教育研究 2013年 10月号, pp.14-17.

植阪友理 (2013)「やってもできない」にしない—苦手意識を克服するための心理学からのアドバイス」特集, pp.681-686.

植阪友理・小玉重夫・大桃敏行「総括ユニット」における3年間の活動の記録 東京大学大学院教育学研究科学校教育高度化センター2013年度年報, pp.94-114

和嶋雄一郎・Emmanuel Manalo・植阪友理 (2013) 学生が持つ図に対する認知イメージの構造の分析 植阪友理・Emmanuel Manalo (編)「心理学からみた効果的な学び方の理解と支援—学習方略プロジェクトH24年度の研究成果—」Working Papers, Vol. 2. pp.19-25.

瀬尾美紀子・赤坂康輔・植阪友理・市川伸一 (2013). 学習をふり返る力—「教訓帰納」を促す中学校教

育プログラムの開発と実践—植阪友理・Emmanuel Manalo（編）「心理学からみた効果的な学び方の理解と支援—学習方略プロジェクトH24年度の研究成果—」Working Papers, Vol. 2. pp.29-38.

佐藤昭宏・植阪友理・床勝信 メタ認知方略の自発的利用を促す通信教材の開発 植阪友理・Emmanuel Manalo（編）「心理学からみた効果的な学び方の理解と支援—学習方略プロジェクトH24年度の研究成果—」Working Papers, Vol. 2. pp.39-51.

深谷達史・田中瑛津子・植阪友理・田中麻紗子・市川伸一（2013）学習者相互の教え合いを促す高校での学習法講座の実践 植阪友理・Emmanuel Manalo（編）「心理学からみた効果的な学び方の理解と支援—学習方略プロジェクトH24年度の研究成果—」Working Papers, Vol. 2. pp.52-64.

〈査読なし学会、シンポジウム等発表〉

植阪友理（2013年、8月）「個別学習指導を通じた支援」自主シンポジウム「『教訓帰納』を取り入れた学習場面の展開—認知カウンセリングからの広がり—」における話題提供 第55回日本教育心理学会総会

植阪友理（2013年、8月）自主シンポジウム「自己調整学習とメタ認知」における指定討論 第55回日本教育心理学会総会

植阪友理・深谷達史・篠ヶ谷圭太・市川伸一（2013、8月）．高校における教え合い講座の実践(1)—教え合いの質が高まらない理由—（ポスター発表）日本教育心理学会第55回総会 法政大学

深谷達史・田中瑛津子・植阪友理・市川伸一（2013、8月）．高校における教え合い講座の実践(2)—実践の改善および学習方略への転移効果の検討—（ポスター発表）日本教育心理学会第55回総会 法政大学

植阪友理（2013、4月）．「失敗を生かした学び方の工夫」東京大学学校教育 高度化センター主催国際シンポジウム「失敗を教育に活かす」4月20日 話題提供（同時通訳つき）

〈招待講演〉

植阪友理（2014）「実技系科目における『教えて考えさせる授業』—国語授業に認知心理学の発想をどのように生かすか—」，静岡県袋井市立南小学校，1月31日（招待講演）

植阪友理（2013）「学力と学習スキルを育てる授業—理解と表現をより良く生かすために—」，静岡県袋井市立高南小学校，11月20日（招待講演）

植阪友理（2013）「認知心理学から見た学習改善—学習観・学習方略にどうはたらきかけるか—」日本心理学会公開シンポジウム『学校現場における心理学』，東京大学，東京，8月22日（招待講演）

植阪友理（2013）「心理学による学習法と学習観の改善—理論から実践まで—」岡山県岡山市富山小学校，8月21日（招待講演）

植阪友理（2013）「理解と表現を大切にしたい授業づくり—認知心理学を学校教育に活かす—」静岡県掛川市袋井南中学校，6月19日（招待講演）

植阪友理（2013）「学び方の指導とは？—心理学からみた効果的な学習法」岡山県岡山市富山中学校，5月25日（招待講演）

工 藤 彰（特任助教）

〈講演〉

工藤彰（招待講演），「文芸テキストを解析する：作風変化と物語構造」，東京大学ブラウンバック，2013年7月．

工藤彰（招待講演），「文学研究のBプラン」，東京工業大学ランチョンセミナー，2013年6月．

清 水 大 地（特任助教）

〈著書〉

特に無し

〈雑誌論文〉

清水大地・岡田猛（共著），「ストリートダンスにおける即興的創造過程」，『認知科学』第20号，日本認知科学会，2013，pp.421-438.

清水大地・岡田猛（学会発表），「ブレイクダンスにおける踊りの習得とその発展」，『2013年度人工知能学会全国大会（第27回）論文集』，2013.

Shimizu, D., & Okada, T.（学会発表），Physical Skill and Idea Interaction in the Creation of New Dance Movements, *The 35th Annual Meeting of the Cognitive Science Society*, 2013.

Shindo, H., Shimizu, K., & Shimizu, D.（学会発表），Development of Curators' Attitudes towards Education Programs, *Activating Inspiration & Creativity: The Tokyo International Symposium for Learning in Art, Science and Technology*, 2013.

臨床心理学コース

下 山 晴 彦 (教授)

〈著書〉

下山晴彦 (単著), 『臨床心理学をまなぶ2 実践の基本』, 東京大学出版会, 2014, 総頁数335.

下山晴彦 (分担執筆), 「問題の柔軟な理解と的確な支援に向けて」, 『発達障害支援必携ガイドブック—問題の柔軟な理解と的確な支援のために—』 (下山晴彦・村瀬嘉代子共編), 金剛出版, 2013, pp15-23.

〈編著〉

下山晴彦 (共編), 『認知行動療法』 (神村栄一氏との共編), 放送大学教育振興会, 2014, 総頁数244.

下山晴彦 (臨床領域担当), 『最新心理学事典』 (藤永保監修), 平凡社, 2013.

下山晴彦 (編著), 「特集: ケース・カンファレンスの理論と実際」, 『精神療法』, 39(5), 2013, pp5-108

下山晴彦 (共編), 『発達障害支援必携ガイドブック』 (村瀬嘉代子氏との共編), 金剛出版, 2013, 総頁数509.

〈監修〉

下山晴彦 (監修), 『子どものこころが育つ心理教育授業のつくり方—スクールカウンセラーと教師が協働する実践マニュアル—』 (松丸未来・鴛渕るわ・堤亜美著), 岩崎学術出版社, 2013, 総頁数160.

〈雑誌論文〉

下山晴彦 (共編), 「特集: 発達障害研究の最前線」 (辻井正次氏との共編), 『臨床心理学』, 14 (3), 2014, pp.315-381.

下山晴彦 (単著), 「臨床心理学における認知行動療法の位置づけ」, 『臨床心理学』, 13(2), 2013, pp180-184.

下山晴彦 (単著), 「ケースカンファレンスの目的と方法」, 『精神療法』, 39(5), 2013, pp643-648.

下山晴彦 (共著), 「ケースカンファレンスⅠ」 (山上敏子氏, 中村伸一氏, 原田誠一氏, 妙木浩之氏との共著) 『精神療法Ⅰ』, 39(5), 2013, pp666-688.

下山晴彦 (共著), 「ケースカンファレンスⅡ」 (山上敏子氏, 中村伸一氏, 原田誠一氏, 妙木浩之氏との共著) 『精神療法Ⅱ』, 39(5), 2013, pp699-706.

下山晴彦 (共著), 「統合的心理療法との対話—「生活」とエビデンス」 (村瀬嘉代子・下山晴彦共著), 『精神療法』, 39(4), 2013, pp532-538.

下山晴彦 (共著), 「インターネットを介したいじめ

の理解と対応に関する臨床心理学的展望——青年期のネットいじめに注目して——」 (浦野由平氏, 河合輝久氏, 遠藤麻美氏, 高木郁彦氏との共著) 『東京大学大学院教育学研究科臨床心理学コース紀要』, 37, 2014, pp49-56.

下山晴彦 (共著), 「発達障害を有する子どもの強迫性障害への認知行動療法—最新の文献レビューから—」 (小倉加奈子氏, 野中舞子氏, 砂川芽吹氏, 矢野玲奈氏との共著), 『東京大学大学院教育学研究科臨床心理学コース紀要』, 37, 2014, pp34-40.

下山晴彦 (共著), 「学童期の放課後活動が担う役割の検討—現状と臨床心理学的観点からの考察—」 (中川実耶氏, 大上真礼氏, 樋口紫音との共著), 『東京大学大学院教育学研究科臨床心理学コース紀要』, 37, 2014, pp57-63.

下山晴彦 (共著), 「児童青年期の抑うつ認知行動療法プログラムの改定——ケースから見出された児童青年期の抑うつの特徴に着目して——」 (野津弓起子氏, 樫原潤氏, 菅沼慎一郎氏, 浦野由平氏, 安婷婷氏との共著) 『東京大学大学院教育学研究科臨床心理学コース紀要』, 37, 2014, pp17-25.

下山晴彦 (共著) 「セルフ・メンタルケアのためのモニタリング・アプリケーション開発の試み—ICT技術によって動機づけを維持する工夫—」 (平野真理氏, 小倉加奈子氏との共著), 『東京大学大学院教育学研究科臨床心理学コース紀要』, 37, 2014, pp26-33.

下山晴彦 (共著), 「家族から見た発達障害の理解と支援」 (山本瑛美氏, 松田なつみ氏, 高岡佑壮氏, 藤尾未由希氏との共著), 『東京大学大学院教育学研究科臨床心理学コース紀要』, 37, 2014, pp41-48.

〈訳書〉

下山晴彦 (監訳), 「子どもと家族のための認知行動療法 2 不安障害」 (Stallard, P. 2009 *Anxiety : Cognitive Behaviour Therapy with Children and Young People*, Routledge), 誠信書房, 2013, 総頁数220.

下山晴彦 (監訳), 「子どもと家族のための認知行動療法 3 PTSD」 (Smith, P., Perrin, S., Yule, W., & Clark, D. M., 2010 *PTSD: Cognitive Behaviour Therapy with Children and Young People*, Routledge), 誠信書房, 2013, 総頁数225.

下山晴彦 (監訳), 「子どもと家族のための認知行動療法 4 摂食障害」 (Gowers, S. G., & Green, L., 2009 *Eating Disorder: Cognitive Behaviour Therapy with Children and Young People*, Routledge), 誠信書房,

2013, 総頁数194.

下山晴彦 (監訳), 「子どもと家族のための認知行動療法 5 強迫性障害」(Waite, P., & Williams, T., 2009 Obsessive Compulsive Disorder: Cognitive Behaviour Therapy with Children and Young People, Routledge), 誠信書房, 2013, 総頁数201.

高橋 美保 (准教授)

〈著書〉

高橋美保 (分担執筆), 「21. うしなう リストラ」, 日本発達心理学会 (編) 『発達心理学事典』, 丸善出版, 2013, pp.492-493.

高橋美保 (分担執筆), 「13. 働く 働きざかり」, 日本発達心理学会 (編) 『発達心理学事典』, 丸善出版, 2013, pp.302-303.

高橋美保 (分担執筆), 「9. 臨床 24. 心理療法」, 藤永保 (監修) 内田伸子・繁榎算男・杉山憲司 (責任編集委員) 『最新 心理学事典』, 平凡社, 2013, pp.399-400.

高橋美保 (分担執筆), 「9. 臨床 30. 遊戯療法」, 藤永保 (監修) 内田伸子・繁榎算男・杉山憲司 (責任編集委員) 『最新 心理学事典』, 平凡社, 2013, p.716.

〈雑誌論文〉

高橋美保 (共著), 「失業者のメンタルヘルスに対する影響要因の検討—就労の機能に注目して」(森田慎一郎氏・石津和子氏との共著). 『臨床心理学』 79, 2014, pp.90-99.

高橋美保 (共著), 「文系低学年の大学生における職業への志向—選抜性による違いに着目して—」(森田慎一郎氏・石津和子氏との共著). 『産業組織心理学研究』 27-1, 2013, pp.21-30.

高橋美保 (共著), 「非自発的非正規雇用者の働くことに関する意識—自発的非正規雇用者・正規雇用者・失業者との比較—」(森田慎一郎氏・石津和子氏との共著). 『キャリアデザイン研究』 9, 2013, pp.155-165.

高橋美保 (共著), 「臨床家養成教育におけるロールレタリング活用の試み—体験のプロセスに着目した質的検討—」(足立英彦氏・大西未紗氏・竜崎瑤子氏・伴恵理子氏との共著). 『臨床心理学コース紀要』 第37集, 2014, pp.102-111.

高橋美保 (共著), 「一日内観の効果と心理的変容プロセスに関する研究—臨床家の卵の視点から—」(丸山由香子氏・田川薫氏・石黒香苗氏・横田七

海子氏との共著). 『臨床心理学コース紀要』 第37集, 2014, pp.112-119.

高橋美保 (共著), 「心理援助職の初心者におけるフォーカシングの効果と応用の検討—フォーカシングワークショップ体験による心理的な変化に着目して—」(鮫島 啓氏・李 健實氏・渡辺 美穂氏との共著). 『臨床心理学コース紀要』 第37集, 2014, pp.120-128.

高橋美保 (共著), 「高校生のためのライフキャリア教育の開発と効果測定」(石津和子氏・森田慎一郎氏との共著). 『平成25年度駒沢学園心理相談センター紀要』, 2014, pp.13-18.

高橋美保 (単著), 「“社会” 復帰に活かす森田療法」. 『日本森田療法学会雑誌』 24-1, 2013, pp.71-75.

高橋美保 (単著), 「二つの受容 (アクセプタンス) をめぐって—特集エッセイ 受容の構造と作用機序」, 『精神療法』 39-6, 2013, pp.894-896.

高橋美保 (単著), 「臨床心理ケーススタディ①コアから思考する 産業 うつ病予防とうつ病リワーク—プリベンション・ポストベンション」, 『臨床心理学』 増刊第5号, 2013, pp.129-134.

〈学会発表〉

高橋美保・石橋太加志・西脇佳子・對比地覚 (学会発表), 「中高一貫校におけるライフキャリア教育」日本発達心理学会第25回大会発表論文集, 2014, p.454.

高橋美保・森田慎一郎・石津和子 (学会発表), 「日本・カナダの大学生における失業者に対するスティグマ—キャリア観との関連を中心に—」, 『日本心理学会第77回大会 発表論文集』, 2013, p.197.

高橋美保・森田慎一郎・石津和子 (学会発表), 「ライフキャリアレジリエンス—中高生のキャリア教育の効果測定のための尺度の作成—」, 『日本コミュニティ心理学会第16回大会 プログラム発表論文集』, 2013, pp.130-131.

〈シンポジウム等〉

高橋美保 (企画・司会者), 「実行委員会企画シンポジウム2—メンタル不調者が働き続けることのできる社会を作るために—産業人と法学者との対話から心理的援助を考える」, 日本心理臨床学会, 2013.

高橋美保 (話題提供者), 「実行委員会企画シンポジウム3—臨床心理学の発展に向けて日本心理研修センターとの対話—教育訓練カリキュラムと臨床心理士の位置づけを巡って」, 日本心理臨床学会,

2013.

高橋美保（発表者），「働く人のこころのケアの現場から「産業－福祉連携事業」第1回準備会合（座談会）“こころの再生：癒しの郷・熊野の可能性を考える”」，2013.

高橋美保（パネラー），「コミュニティ心理学の視点から“第36回 日本内観学会「メインシンポジウム 支え合い，支援し合う関係から生まれる力”」，2013.

高橋美保（指定討論者），「心理臨床の視点から“2013年度 学校教育高度化センター主催シンポジウム 失敗を教育に活かす”」，2013.

〈その他の業績〉

高橋美保（単著），「臨床シンポジウム－近接領域との対話」（心理職が応える），『臨床心理学』14-2，2014，p.293.

高橋美保（単著），「マインドフルネス・ストレス低減法ワークブック ボブ・スताल/エリシャ・ゴールドSTEIN著 家接 哲次訳（書評）」，『精神療法』40-2，2014，pp.315-316.

高橋美保（単著），「マインドフルネスそしてACT（アクセプタンスコミットメント・セラピー）へ 熊野宏昭著（書評）」，『精神療法』39-2，2013，p.305.

石 丸 径一郎（講師）

〈分担執筆〉

石丸径一郎「認知行動療法の技法群(3)：認知療法①」「認知行動療法の技法群(3)：認知療法②」下山晴彦・神村栄一（編著）『認知行動療法（放送大学教材）』（財）放送大学教育振興会，2014，173-196.

〈雑誌論文〉

石丸径一郎「メンタルヘルスと性の問題」『心と社会』，152，2013，pp.120-124.

〈その他〉

石丸径一郎「性障害」藤永保（監修）内田伸子・繁榎算男・杉山憲司（編）『最新心理学事典』平凡社，2013，421.（事典項目）

石丸径一郎「ジョージ・ボナーノ（著）高橋祥友（監訳）『リジリエンス－喪失と悲嘆についての新たな視点』」『臨床心理学』，13(4)，2013，591-592.（書評）

袴 田 優 子（講師）

〈国際誌掲載論文（査読有）〉

Hakamata Y, Izawa S, Sato E, Komi S, Murayama N, Moriguchi Y, Hanakawa T, Inoue Y, Tagaya H. Higher

cortisol levels at diurnal trough predict greater attentional bias towards threat in healthy young adults. *Journal of Affective Disorders*, vol.151(2), pp775-9, 2013.

Hakamata Y, Iwase M, Kato T, Senda K, Inada T. The neural correlates of mindful awareness: a possible buffering effect on anxiety-related reduction in subgenual anterior cingulate cortex activity. *PLoS One*. Vol. 8(10):e75526, 2013.

〈国内誌掲載論文〉

田ヶ谷浩邦・袴田優子・村山憲男，致死性家族性不眠症（プリオン病），臨床神経科学，31 218-219，2013.

田ヶ谷浩邦，村山憲男，袴田優子，知っておきたい高齢者の睡眠障害 総説 3. 高齢者に対する睡眠薬の使い方，*Geriatr Med*，51(11) 1143-1146，2013.

田ヶ谷浩邦，袴田優子，村山憲男，睡眠・覚醒の評価「一般医療機関における睡眠障害スクリーニングガイドライン」の要点，日本臨床，71 199-204，2013.

田ヶ谷浩邦，袴田優子，村山憲男，孤発性の諸症状，正常範囲と思われる異型症状，未解決の諸問題 寝言，日本臨床，71 522-525，2013.

田ヶ谷浩邦，村山憲男，袴田優子，概日リズム睡眠障害群「概日リズム睡眠障害（CRSD）の診断・治療・医療連携ガイドライン」の要点，日本臨床，71 425-429，2013.

田ヶ谷浩邦，袴田優子，村山憲男，基礎研究 睡眠覚醒調節の液性機構 ニューロアクティブ・ステロイド（ニューロステロイド），日本臨床，71 127-134，2013.

田ヶ谷浩邦，村山憲男，袴田優子，孤発性の諸症状，正常範囲と思われる異型症状，未解決の諸問題 長時間睡眠者と短時間睡眠者，日本臨床，71 513-516，2013.

田ヶ谷浩邦，村山憲男，袴田優子，神経・精神症候からのアプローチ 睡眠障害（眠れないなどの訴え），日本医師会雑誌，142 S132-S133，2013.

田ヶ谷浩邦，袴田優子，村山憲男，軽症例に対する精神科薬物療法のあり方 不眠と睡眠障害，精神科治療学，28(7) 885-891，2013.

田ヶ谷浩邦，村山憲男，袴田優子，不眠症治療を考える 診断と治療 問診時に注意すべき点，*Clinician*，60(619) 505-511，2013.

〈学会発表〉

袴田優子（シンポジスト），教育訓練カリキュラム

と臨床心理士の位置づけを巡って—生物学的側面の学習の重要性（森田慎一郎・高橋美保・石丸徑一郎・下山晴彦），日本心理臨床学会第32回秋大会，パシフィコ横浜，神奈川県，2013年8月。

袴田優子（司会者），認知バイアスとその修正（杉浦義典・守谷順・高野慶輔・寺島瞳），日本心理臨床学会第32回秋大会，パシフィコ横浜，神奈川県，2013年8月。

平野真理（特任助教）

〈雑誌論文〉

平野真理・小倉加奈子・下山晴彦（共著），「セルフ・メンタルケアのためのモニタリング・アプリケーション開発の試み—ICT技術によって動機づけを維持する工夫—」，『東京大学大学院教育学研究科臨床心理学コース紀要』第37巻，2014，pp. 26-33.

平野真理（学会発表），「双生児におけるレジリエンス要因の類似性と立ち直り体験の違い—ソーシャルサポートの観点から—」，『日本パーソナリティ心理学会第22回大会発表論文集』，2013，p.133.

綾城初穂・平野真理（学会発表），「臨床心理学的援助におけるディスコース・アプローチの可能性—ポジショニング理論による臨床面接データの検討から—」，『日本心理臨床学会第32回秋大会』，2013.

平野真理（学会発表），「中高生における資質的・獲得的レジリエンス要因の様相—学年差と性差の検討—」，『日本教育心理学会第55回総会発表論文集』，2013，p.168.

身体教育学コース

多賀 徹太郎（教授）

〈雑誌論文〉

N. Kanemaru, H. Watanabe, H. Kihara, H. Nakano, R. Takaya, T. Nakamura, J. Nakano, G. Taga, Y. Konishi: Specific characteristics of spontaneous movements in preterm infants at term age are associated with developmental delays at age 3 years. *Developmental Medicine and Child Neurology* 55, 713-721, 2013

M. Imai, H. Watanabe, K. Yasui, Y. Kimura, Y. Shitara, S. Tsuchida, N. Takahashi, G. Taga: Functional connectivity of the cortex of term and preterm infants and infants with Down's syndrome. *NeuroImage* 85, 272-278, 2014

D.A. Boas, C.E. Elwell, M. Ferrari, G. Taga: Twenty years of functional near-infrared spectroscopy: introduction for the special issue. *NeuroImage* 85, 1-4, 2014

H. Oohashi, H. Watanabe, G. Taga: Development of a serial order in speech constrained by articulatory coordination. *PLoS ONE* 8, e78600, 2013.

M. Kato, H. Watanabe, G. Taga: Diversity and changeability of infant movements in a novel environment. *Journal of Motor Learning and Development* 1, 79-88, 2013

多賀徹太郎：複雑系としての脳と身体の発達，精神科 24, 277-281, 2014

〈その他〉

多賀徹太郎：脳・行動・言語の発達における自発性，名古屋，社会性知能研究会 2013. 7.20（招待）

多賀徹太郎：札幌，北大電子研2013. 12.19（招待）

多賀徹太郎：新生児の行動発達モニタリング，信濃大町，第16回「新生児呼吸療法・モニタリングフォーラム」2014. 2.14（招待）

野崎 大地（教授）

〈著書〉

野崎大地，『脳と運動のふしぎな関係：体で覚えるって，どういうこと？』，くもん出版，2014，総頁数109.

〈雑誌論文〉

Kasuga S, Hirashima M, Nozaki D, "Simultaneous Processing of Information on Multiple Errors in Visuomotor Learning" *PLOS ONE*, 2013, 8(8):e72741

Yamanaka K, Kadota H, Nozaki D, "Long-latency TMS-evoked potentials during motor execution and inhibition" *Frontiers in Human Neuroscience*, 2013, 7:751

Yamanaka K, Nozaki D, "Neural Mechanisms Underlying Stop-and-Restart Difficulties: Involvement of the Motor and Perceptual Systems" *PLOS ONE*, 2013, 8(11): e82272

〈招待講演・シンポジウム〉

野崎大地：筋骨格系に内在する冗長性問題とそれを解消する理論的枠組み，東京，2013.9.5-7，第7回 Motor Control研究会（シンポジウム「筋活動二乗と最小則が実現される脳内メカニズム」）

野崎大地：脳の運動学習能力を測る，東京，2013.6.8，第13回東京大学生命科学シンポジウム

Daichi Nozaki: Context dependent formation and retrieval of motor memory: A clinical application perspective., Kyoto, 2013.6.20-23, Neuro2013（シンポジウム「Integration of computational sensorimotor control and rehabilitation」）

Daichi Nozaki: Flexible Motor Control Learnt by Redundant Motor System., Osaka, 2013.7.3-7, 35th Annual International Conference of the IEEE Engineering

in Medicine and Biology Society

野崎大地：運動制御・学習理論の基礎，長野県上田市，2013.8.24，第4回脳神経科学セミナー

野崎大地. Computational approach toward understanding of motor control and learning., 横浜, 2013.9.12-14, ライフエンジニアリング部門シンポジウム2013（上肢運動の制御と学習のメカニズム～基礎と臨床のクロストーク～ Organizer・Session Chair）

Daichi Nozaki: Context dependent formation and retrieval of human motor memories., Tokyo, 2013.11.30-12.1, Global COE Program :The 9th International Sport Sciences Symposium on “Active Life” 招待講演

野崎大地: 子どもの動きと脳, 東京, 2014.3.10, 日本学術会議公開シンポジウム「子どもの動きの獲得に必要な運動・身体活動」

山本義春（教授）

〈論文〉

Iwasaki, S., Y. Yamamoto, F. Togo, M. Kinoshita, Y. Yoshifuji, C. Fujimoto, and T. Yamasoba. Noisy vestibular stimulation improves body balance in bilateral vestibulopathy. *Neurology* 82: 969-975, 2014.

Kishi, A., F. Togo, D. B. Cook, M. Klapholz, Y. Yamamoto, D. M. Rapoport, and B. H. Natelson. The effects of exercise on dynamic sleep morphology in healthy controls and patients with chronic fatigue syndrome. *Physiological Reports* 1: e00152-1-14, 2013.

Nakamura, T., S. Schwander, R. Donnelly, D. B. Cook, F. Ortega, F. Togo, Y. Yamamoto, N. S. Cherniack, M. Klapholz, D. Rapoport, and B. H. Natelson. Cytokines do not change after exercise or sleep deprivation in chronic fatigue syndrome. *Clinical and Vaccine Immunology* 20: 1736-1742, 2013.

Kim, J., T. Nakamura, H. Kikuchi, T. Sasaki, and Y. Yamamoto. Co-variation of depressive mood and locomotor dynamics evaluated by ecological momentary assessment in healthy humans. *PLoS ONE* 8: e74979-1-12, 2013.

Pan, W., S. Kwak, F. Li, C. Wu, Y. Chen, Y. Yamamoto, and D. Cai. Actigraphy monitoring of symptoms in patients with Parkinson's disease. *Physiology and Behavior* 119: 156-160, 2013.

Nakamura, T., J. Kim, K. Takei, S. Taneichi, T. Sasaki, and Y. Yamamoto. Intermittent locomotor dynamics and its transitions in bipolar disorder. In: *Proceedings of 22nd*

International Conference on Noise and Fluctuations, IEEE, doi: 10.1109/ICNF.2013.6578924, 2013.

中村亨, 武井邦夫, 種市摂子, 金鎖赫, 佐々木司, 山本義春. 身体活動時系列に基づく双極性障害の病相転移予測. 不安障害と双極性障害. 貝谷久宣, 佐々木司, 不安・抑うつ臨床研究会編. 日本評論社, 東京, 2013, pp179-195.

中村亨, 山本義春. 自発的身体活動の生成機序と精神疾患における破綻原理の解明. 日本神経回路学会誌 20(3): 123-134, 2013.

中村 亨, 武井邦夫, 種市摂子, 金鎖赫, 佐々木司, 山本義春. 潜在する双極性障害患者を見つけるために—行動解析の観点から—. 精神科 22: 599-604, 2013.

東郷史治（准教授）

〈雑誌論文〉

Togo, F. (共著), 「The effects of exercise on dynamic sleep morphology in healthy controls and patients with chronic fatigue syndrome」, (A. Kishi, D.B. Cook, M. Klapholz, Y. Yamamoto, D.M. Rapoport, B.H. Natelson氏との共著), 『Physiological Reports』第1巻, 2013, e00152.

Togo, F. (共著), 「Cytokines do not change after exercise or sleep deprivation in chronic fatigue syndrome」, (T. Nakamura S. Schwander, R. Donnelly, D.B. Cook, F. Ortega, Y. Yamamoto, N. Cherniack, M. Klapholz, D.M. Rapoport, B.H. Natelson氏との共著), 『Clinical and Vaccine Immunology』第20巻, 2013, pp.1736-1742.

Togo, F. (共著), 「Attention network test: assessment of cognitive function in chronic fatigue syndrome」, (G. Lange, B.H. Natelson, K.S. Quigley氏との共著), 『Journal of Neuropsychology』2013, doi: 10.1111/jnp.12030.

Togo, F. (共著), 「Effects of feeding schedules changes on the circadian phase of the cardiac autonomic nervous system and serum lipid levels」, (T. Yoshizaki, Y. Tada, A. Hida, A. Sunami, Y. Yokoyama, J. Yasuda, A. Nakai, Y. Kawano氏との共著), 『European Journal of Applied Physiology』第113巻, 2013, pp.2603-2611.

Togo, F. (共著), 「Influence of dietary behavior on the circadian rhythm of the autonomic nervous system as assessed by heart rate variability」, (T. Yoshizaki, Y. Tada, A. Hida, A. Sunami, Y. Yokoyama, Y. Kawano氏との共著), 『Physiology & Behavior』第118巻,

2013, pp.122-128.

Togo, F. (共著), 「Diurnal 24-hour variation of ambulatory heart rate variability during day shift in rotating shift workers」, (T. Yoshizaki, Y. Kawano, Y. Tada, A. Hida, T. Midorikawa, K. Hasegawa, T. Mitani, T. Komatsu 氏との共著), 『Journal of Biological Rhythms』第28巻, 2013, pp.227-236.

Togo, F. (共著), 「Noisy vestibular stimulation improves body balance in bilateral vestibulopathy」, (S. Iwasaki, Y. Yamamoto, M. Kinoshita, Y. Yoshifuji, C. Fujimoto, T. Yamasoba 氏との共著), 『Neurology』第82巻, 2014, pp.969-975.

東郷史治 (共著), 「学校精神保健リテラシー教育の各国の現状に関する文献的考察」, (小塩靖崇, 佐々木司氏との共著), 『学校保健学会』第55巻, 2013, pp.325-333.

東郷史治 (共著), 「中高生の睡眠習慣と精神的健康の変化に関する縦断的検討」, (股村美里, 宇佐美慧, 福島昌子, 米原裕美, 西田淳志, 佐々木司氏との共著), 『学校保健研究』第55巻, 2013, pp.186-196.

東郷史治 (共著), 「不安・抑うつ, 精神疾患に関する英国の学校教育」, (小塩靖崇, 北川裕子, 股村美里, 佐々木司氏との共著), 『不安障害研究』第5巻, 2013, pp.39-48.

東郷史治 (共著), 「学校におけるいじめ対策教育—フィンランドのKiVaに注目して—」, (北川裕子, 小塩靖崇, 股村美里, 佐々木司氏との共著), 『不安障害研究』第5巻, 2013, pp.31-38.

東郷史治 (共著), 「学校での体育教育における生活習慣病予防教育の視点」, (志村広子氏との共著), 『精神科』第22巻, 2013, pp.640-645.

東郷史治 (共著), 「休日の身体運動と温泉入浴が労働者の心身に与える影響」, (志村広子, 斎藤宗治, 岡田真平氏との共著), 『温泉医科学研究所研究年報』第34巻, 2013, pp.61-70.

森 田 賢 治 (講師)

〈著書〉

なし

〈雑誌論文〉

Kenji Morita, Mieko Morishima, Katsuyuki Sakai, Yasuo Kawaguchi. “Dopaminergic control of motivation and reinforcement learning: a closed-circuit account for reward-oriented behavior.” *The Journal of*

Neuroscience 33 (2013) pp.8866-8890.

Xiumin Li, Kenji Morita, Hugh P. C. Robinson, Michael Small. “Control of layer 5 pyramidal cell spiking by oscillatory inhibition in the distal apical dendrites: a computational modelling study.” *Journal of Neurophysiology* 109 (2013) pp.2739-2756.

Tae Twomey, Keith J. Kawabata Duncan, John S. Hogan, Kenji Morita, Kazumasa Umeda, Katsuyuki Sakai, Joseph T. Devlin. “Dissociating visual form from lexical frequency using Japanese.” *Brain & Language* 125 (2013) pp.184-193.

岸 哲 史 (助教)

〈雑誌論文〉

Kishi, A., F. Togo, D. B. Cook, M. Klapholz, Y. Yamamoto, D. M. Rapoport, B. H. Natelson. The effects of exercise on dynamic sleep morphology in healthy controls and patients with chronic fatigue syndrome. *Physiological Reports*, 1: e00152-1-14, 2013.

〈学会発表〉

Kishi, A., F. Togo, D. M. Rapoport, B. H. Natelson. The effect of exercise on sleep stage dynamics in healthy controls and patients with chronic fatigue syndrome. *The SLEEP 2013 27th Annual Meeting of the Associated Professional Sleep Societies, LLC*. Baltimore, MD, USA (June, 2013).

教職開発コース

秋 田 喜代美 (教授)

〈著書〉

秋田喜代美・第一日野グループ (編著) 『保幼小連携：育ち合うコミュニティづくりの挑戦』ぎょうせい 2013. 総頁数200p

秋田喜代美 「保育・教育の場におけるアクションリサーチと実践的知識」やまだようこ・麻生 武・サトウタツヤ・能智正博・秋田喜代美・矢守克也 (編) 『質的心理学ハンドブック』新曜社 2013. Pp.417-431.

秋田喜代美 「格差・落差・段差のない学校読書環境の実現を」子安増生・仲真紀子 (編) 『ここが育つ環境を創る：発達心理学からの提言』新曜社 2014 pp.47-64

秋田喜代美・安見克夫 (共著) 『秋田喜代美と安見克夫が語る写真で見るホンモノ保育：憧れを育てる』ひかりのくに 2013 pp.79

〈学術論文〉

- 秋田喜代美「レッジョ・エミリアに学ぶ保育の質」
こども学, 1, 8-28. 2013
- 秋田喜代美「子どもの学びの多様性から考える保育・授業」LD研究, 23(1), 22-28. 2014.2
- 秋田喜代美「学び続ける教師をいかに育み支援するか」教師学研究, 13, 1-12.
- 深谷優子・林寛平・秋田喜代美「スウェーデンの読書活動推進政策の展開：学校図書館へのアクセスと機能を中心にして」読書科学56(1), 14-25.
- 王林峰・秋田喜代美「中学校英語教科書本文内容の記述における修辞パターンの分析：テキストのつながりに焦点を当てて」読書科学56(1), 26-36.
- 秋田喜代美・斎藤兆史・藤江康彦・藤森千尋・柁木貴之 王林峰・三瓶ゆき (2014)「文法学習に関わる要因の教科横断的検討：文法課題遂行と有用感・好意度・学習方略間の関連」『東京大学大学院教育学研究科紀要』53, 173-180 2014.
- 斎藤兆史・秋田喜代美・藤江康彦・藤森千尋・柁木貴之 王林峰・三瓶ゆき「メタ文法カリキュラムの開発——中等教育における国語科と英語科を繋ぐ教科横断カリキュラムの試み」『東京大学大学院教育学研究科紀要』53, pp.255-272 2014

〈一般雑誌論文〉

- 秋田喜代美「子どもの育ちと保育の質」雑誌発達, 34, 4-5. 2013
- 秋田喜代美「総論 保育者の専門性の探求」雑誌発達, 34, 14-21. 2013
- 秋田喜代美「明日につながる保育」幼稚園じほう 41(3), 5-11. 2013
- 秋田喜代美「保育の質と子どもの発達」(財) 成長科学協会「研究年報」36, 167-169. 2013
- 秋田喜代美「創造力を培う遊び」日本教材文化研究財団紀要, 43, 52-56. 2014.
- 秋田喜代美「学びに向かう力を育てる」教育経営方略23, 2-3. 2014
- 秋田喜代美 授業の本質とは：子どもにとって学びがいのある授業をめざして」教育展望 60(2), 4-11. 2014
- 秋田喜代美 先達の志に学ぶ保育学文化」保育学研究, 51(1), 3-4. 2013

〈海外講演・学会発表〉

- Akita, K. "How do Discourses on Lesson Studies Change When the Focus Is Placed on Low-Achieving Students' Learning Processes?" *European Association of Learning*

and Instruction Invited Session. "In What Ways can Lesson Study in Different Cultural Environments Contribute to Increase Low-achieving Students' School Performance?" 2013.4.30 AERA:San Francisco

Akita, K "Japanese Lesson Study in Early Childhood Education and Care" *Invited Plenary Session.2013.9 World Association of Lesson Studies. Sweden University of Gothenburg.*

秋田喜代美「日本における保育の質向上のための園内研修・保育環境の工夫」華東師範大学就学前教育学院招待講演 2013.12 中国：上海 華東師範大学

中坪史典・門田理世・秋田喜代美・小田豊・無藤隆・芦田宏・鈴木正敏・野口隆子・箕輪潤子・森暢子・上田敏丈「写真評価法 (PEMQ) から振り返る保育環境 (1) 言葉をめぐる環境構成を中心に」日本保育学会第66回大会発表要旨集, 347 2013.5.13.

門田理世・中坪文典・秋田喜代美・小田豊・無藤隆・芦田宏・鈴木正敏・野口隆子・箕輪潤子・森暢子・上田敏丈「写真評価法 (PEMQ) から振り返る保育環境 (2) 保育者が提示する保育環境写真を評価する視点」日本保育学会第66回大会発表要旨集, 348 2013. 5.13.

一前春子・秋田喜代美「全国自治体による保幼小接続カリキュラムと実践事例の分析」日本保育学会第66回大会発表要旨集, 560 2013.5.

秋田喜代美「子どもの視点から持続可能な保育システムのあり方を探る 4—「保育教諭の専門性」を高める制度とは」日本保育学会企画シンポジウム保育政策研究委員会話題提供 日本保育学会第66回大会, 40-41.2013.5

秋田喜代美「実践とともにあるアクションリサーチ」日本質的心理学会10周年記念「質的心理学ハンドブック」シンポジウム話題提供者 2013. 6. 立命館大学

濱田秀行・藤森裕治・八木雄一郎・秋田喜代美「子どもの頃の読書が成人の意識・意欲・行動に与える影響：世代間差に注目して」日本読書学会第57回研究大会発表資料集, 57-66. 2013.8

林寛平・深谷優子・秋田喜代美「スウェーデンの青少年読書指導と図書館」日本読書学会第57回研究大会発表資料集, 113-122. 2013.8

野口隆子・上田敏丈・秋田喜代美・無藤隆・小田豊・箕輪潤子・中坪史典・芦田宏・鈴木正敏・門田理世・森暢子「保育の質が幼児の発達に与える影響

(1) —4歳児クラスの言語発達と月齢、園差、文字意識との関連」日本教育心理学会第55回総会発表論文集, 489. 2013.8

上田敏丈・野口隆子・秋田喜代美・無藤隆・小田豊・箕輪潤子・中坪史典・芦田宏・鈴木正敏・門田理世・森暢子「保育の質が幼児の発達に与える影響(2) —4歳児クラスの科学的思考発達と園差・月齢の関連」日本教育心理学会第55回総会発表論文集, 490. 2013.8

秋田喜代美・深谷優子・上原友紀子「中学生・高校生の読書と学校の読書推進活動(1) 生徒による読書推進積極性評価と指導体制・環境の学校間差」日本教育心理学会第55回総会発表論文集, 569. 2013.8

深谷優子・秋田喜代美・上原友紀子・宇佐美慧・南風原朝和「中学生・高校生の読書と学校の読書推進活動(2) 未来志向・市民性と学校の読書推進との関連」日本教育心理学会第55回総会発表論文集, 570. 2013.8

上原友紀子・秋田喜代美・深谷優子「中学生・高校生の読書と学校の読書推進活動(3) 読書活動・体験活動の多寡と現在の意識・意欲・能力との関係」日本教育心理学会第55回総会発表論文集, 571. 2013.8

箕輪潤子・秋田喜代美・安美克夫・増田時枝・砂上史子・中坪史典「4歳児の片付けの開始時と終了時における保育者の方略—物・場所に注目して」日本教育心理学会第55回総会発表論文集, 580. 2013.8

〈教材開発〉

監修執筆 高等学校家庭科教科書『子どもの発達と保育』教育図書；同指導書『子どもの発達と保育 育つ育てる 育ち合う教師用指導書』教育図書 2014.3

企画監修 シリーズ 本屋さんのすべてがわかる本 全4巻『調べよう 世界の本屋さん』『調べよう 日本の本屋さん』『見てみよう 本屋さんの仕事』『もっと知りたい本屋さんの秘密』2013, 2014.1.

浅井幸子(准教授)

〈雑誌論文〉

浅井幸子「保育記録と心理学—明治末における松本孝次郎の児童研究に着目して—」『和光大学総合文化研究所年報 東西南北2014』, 2014年3月,

156-174頁。

浅井幸子・船山万里子・杉山二季・黒田友紀・玉城久美子・望月一枝「女性教師の声を聞く—小学校の女性教師のライフヒストリー・インタビューから—」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第53号, 2014年3月, 181-204頁。

船山万里子・玉城久美子・杉山二季・黒田友紀・浅井幸子・望月一枝「小学校における女性教師のキャリア形成—学年配置に着目して—」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第53号, 2014年3月, 213-223頁。

〈学会発表〉

(ラウンドテーブル) 浅井幸子・望月一枝・黒田友紀・杉山二季・玉城久美子・船山万里子・岡野八代「教師の経験とジェンダー—小学校における男女教師の学年配置に着目して—」日本教育学会第72回大会, 2013年8月28日。

〈その他〉

(図書紹介)「勅使千鶴・亀谷和史・東内瑠里子編著『「知的な育ち」を形成する保育実践—海卓子, 畑谷光代, 高瀬慶子に学ぶ—』』『幼児教育史研究』8号, 2013年11月, 57-59頁。

藤江康彦(准教授)

〈著書〉

藤江康彦(分担執筆), 「フィールドにおける教育・学習研究」やまだようこ・麻生武・サトウタツヤ・能智正博・秋田喜代美・矢守克也(編), 『質的心理学ハンドブック』, 新曜社, 2013, Pp.259-272.

藤江康彦(分担執筆), 「社会」清水益治・森敏昭(編著), 『0歳~12歳児の発達と学び: 保幼小の連携と接続に向けて』, 北大路書房, 2013, Pp.141-150.

〈雑誌論文〉

藤江康彦(共著), 「文法学習に関わる要因の教科横断的検討: 文法課題遂行と有用感・好意度・学習方略間の関連」(秋田喜代美・斎藤兆史・藤森千尋・柁木貴之・王林鋒・三瓶ゆきとの共著), 『東京大学大学院教育学研究科紀要』53, 2014, Pp.173-180.

藤江康彦(共著), 「メタ文法カリキュラムの開発: 中等教育における国語科と英語科を繋ぐ教科横断カリキュラムの試み」(斎藤兆史・秋田喜代美・藤江康彦・藤森千尋・柁木貴之・王林鋒・三瓶ゆきとの共著), 『東京大学大学院教育学研究科紀要』53, 2014, Pp.255-272.

〈学会発表〉

藤江康彦（単著），「教師の学習の契機としての校種間連携：小中一貫教育校における教師の経験を事例として」『日本教育心理学会第55回大会発表論文集』，2013，2. 2013年8月17日（於：法政大学）

藤江康彦（共著），「文法学習における有用感・好意度・学習方略使用度と文法得点との関連性：国語科と英語科の教科横断的検討」（藤森千尋・三瓶ゆき・秋田喜代美との共著）『日本教育心理学会第55回大会発表論文集』，2013，225. 2013年8月17日（於：法政大学）

藤江康彦（単著），「教育方法学の「臨床」性と「実証」的研究方法（課題研究Ⅲ 教育方法学の学問的固有性とはなにか）」『日本教育方法学会第49回大会発表論文集』，2013 122-123. 2013年10月6日（於：埼玉大学）

〈その他〉

藤江康彦（図書紹介）「苅宿俊文・佐伯胖・高木光太郎（編）『ワークショップと学び 第1巻 まなびを学ぶ』，『ワークショップと学び 第2巻 場づくりとしてのまなび』，『ワークショップと学び 第3巻 まなびほぐしのデザイン』」『教育学研究』，80(4)，2013，Pp.520-521.

藤江康彦（招待講演），「授業研究を行うにあたって」『日本音楽教育学会第12回音楽教育ゼミナール最先端の授業研究を学ぼう！』（『日本音楽教育学会第12回ゼミナール報告書』，Pp.20-23），2013年8月24日（於：立教大学池袋キャンパス）

教育内容開発コース

北村友人（准教授）

〈著書〉

北村友人（分担執筆），「フィリピン中等教育拡大に伴う質的課題」（中井俊樹との共著），馬越徹・大塚豊編『アジアの中等教育改革ーグローバル化への対応ー』東信堂，2013，92-114頁。

Yuto Kitamura（分担執筆），“The Influence of Neo-Liberalism on Japan's Educational Reforms,” in Turner, D. A. and Yolcu, H. (eds.), Neo-liberal Educational Reforms: A Critical Analysis. New York: Routledge, 2014, pp.118-138.

〈雑誌論文〉

北村友人（単著），「東南アジアにおける高等教育連携と国際協力ネットワークー地域ネットワークの展開とSEAMEOカレッジ設立の意義ー」『留学交

流』Vol.27，日本学生支援機構，2013，1-8頁。

北村友人（単著）「留学生をめぐる国際的な競争と協調ーアジアの状況を通して考えるー」『IDE 現代の高等教育』No.558，2014，51-57頁。

Yuto Kitamura（単著），“Survey on the Academic Profession in Cambodia” (with Naoki Umemiyaとの共著), The Changing Academic Profession in Asia: Teaching, Research, Governance and Management. Hiroshima: Research Institute for Higher Education, Hiroshima University, 2013, pp.71-88.

Yuto Kitamura（共著），“Higher Education in Cambodia: Expansion and quality improvement” (James H. Williams, C. Sopheak Kengとの共著), *Higher Education Forum*, Vol.11, 2014, pp.67-90.

Yuto Kitamura（共著），“Integration and Diffusion in Sustainable Development Goals: Learning from the Past, Looking into the Future” (Norichika Kanie 他12名との共著), *Sustainability*, Vol. 6, No.4, 2014, pp.1761-1775.

学校開発政策コース

大桃敏行（教授）

〈著書〉

大桃敏行・押田貴久（共編著）『教育現場に革新をもたらす自治体発カリキュラム改革』学事出版，2014年3月。編集と「第1章 公教育システムの改革と自治体発のカリキュラム改革」（8-16頁）の執筆。

〈雑誌論文，図書紹介，その他〉

大桃敏行（単著）「教育行政学と高等教育研究」日本高等教育学会『高等教育研究』第16集，2013年5月，47-63頁。

大桃敏行（単著）「教育のガバナンス改革とNPMと新自由主義ー米国連邦教育政策の事例分析ー」『日本教育政策学会年報』第20号，2013年7月，8-24頁。

大桃敏行（図書紹介）松原信継著『アメリカにおける教育官僚制の発展と克服に関する研究ー歴史的・制度的視点からー』教育史学会『日本の教育史学』第56集，2013年10月，187-189頁。

大桃敏行（単著）「アメリカ合衆国の教育法制と教員政策」（改訂）若井彌一監修『必携教職六法』（2015年度版）協同出版，2014年2月，878-879頁。

大桃敏行（単著）「はじめに一仕組みによる改善と自律的責任ー」『東大附属論集』第57号，2014年3月，1-2頁。

〈学会発表等〉

大桃敏行「米国連邦教育政策にみる政策理念の対

抗・交差とガバナンス改革—クリントン政権初期政策を事例に—」日本教育行政学会第48回大会、京都大学、2013年10月12日。
大桃敏行「教育行政学の視点から」（指定討論）日本学術会議主催学術フォーラム「格差社会における子ども子育て政策のこれから」日本学術会議、2013年7月7日。

勝野正章（教授）

〈著書（共著）〉

1. 佐藤学・勝野正章『安倍政権で教育はどう変わるか』岩波書店、2013年6月、62p. 執筆箇所「教育委員会制度改革の問題点」pp.34-50、「教師に対する管理強化と教育の国家統制」pp.51-59、「あとがき」pp.60-62

〈著書（分担執筆）〉

1. 勝野正章「教職員を最も信頼しなければならないのは誰か」岩波書店編集部編『これからどうする 未来のつくり方』岩波書店、2013年6月、pp.487-489.
2. 勝野正章「教師のアイデンティティを編み直す—教育改革へのもう一つの視点」教育科学研究会編（佐貫浩・佐藤広美・宮下聡・中田康彦編集委員）『講座 教育実践と教育学の再生 5 3.11と教育改革』かもがわ出版、2013年12月、pp.235-244.
3. 勝野正章「第13章 新しい時代における教師の役割と責務—ILO・ユネスコ「教員の地位に関する勧告」—」山崎準二・矢野博之編著『新・教職入門』学文社、2014年3月、pp.135-142.

〈論文〉

1. 細野隆彦・勝野正章「教職員に対する管理強化と教育の自由」生活教育、2013年4月号、No.773、pp.54-61.
2. 勝野正章「教員評価の国際的動向と日本の課題」教育目標・評価学会紀要、第23号、2013年11月、pp.21-27
3. 竹森香以・八木真也・勝野正章「釧路市学力保障条例の研究(1)」東京大学大学院教育学研究科学校開発政策コース 教育行政学論叢 第33号、2013年10月、pp.77-96.
4. 勝野正章「学校週六日制・土曜授業を考える」学校運営（全国公立学校教頭会編集・発行）、2014年1月号、pp.6-9.
5. 勝野正章「学校評価と学校づくり」大学評価学

会年報、第8号『現代社会と大学評価』2014年3月、pp.58-67.

6. 勝野正章「教育のガバナンス改革と教職の専門職性」日本教育法学会年報、第43号『教育の政治化と子ども・教師の危機』、2014年3月、pp.72-80.
7. 勝野正章「ナショナリズムと市場主義的グローバリズムを背景に安倍政権が急ピッチで進める『教育再生』のめざすもの」週刊金曜日 984号（2014年3月21日号）、pp.12-13.

〈学会発表〉

1. 勝野正章「教育のガバナンス改革と教職の専門職性」日本教育法学会第43回定期総会第2分科会、早稲田大学、2013年5月26日.
2. 勝野正章「臨床教育学は政策とどのような関係を取り結ぶのか」日本臨床教育学会第3回研究大会 特別課題研究「臨床教育学の方法と概念」、武庫川女子大学、2013年9月28日
3. 勝野正章「Living through the Educational Governance Reform in Japan: The enactment of teacher evaluation policy in school」日本教育行政学会第48回大会国際シンポジウム「検証 教育のガバナンス改革 英米日韓4カ国の事例からトレンドを探る」、京都大学、2013年10月12日.

〈その他〉

1. 平成23年（不）第1号及び平成23年（不）第2号 北海道人事委員会「不利益処分審査請求事案」意見書、2013年8月.

村上祐介（准教授）

〈著書〉

篠原清昭編著、『教育のための法学』、ミネルヴァ書房、2013、21-35頁（第2章「自治体と教育法」を担当）
若井彌一他編、『必携教職六法（2015年度版）』、協同出版、2014、934-966頁（教育法制史年表を担当）

〈雑誌論文〉

村上祐介（単著）、「政権交代による政策変容と教育政策決定システムの課題」『日本教育行政学会年報』第39号、2013、37-52頁

〈その他〉

村上祐介（単著）、「図書紹介・三上昭彦著『教育委員会制度論—歴史的動態と〈再生〉の展望』、『教育学研究』、第81巻第1号、2014、99-100頁
村上祐介（単著）、「中央教育審議会教育制度分科

会「今後の地方教育行政の在り方について（審議経過報告）」の概要と今後の論点」、『教職研修』、2013年12月号、70-71頁

村上祐介（単著）、「アメリカの教育委員会を見て感じたこと」、『週刊教育資料』、2013年11月18日号、38頁

村上祐介（単著）、「書評：世取山洋介・福祉国家構想研究会編『公教育の無償性を実現する一教育財政法の再構築』」、『教育行財政論叢』、第33号、2013、299-304頁

村上祐介（単著）、「教育ウォッチ（第150～152回）」、『日本教育新聞』、2013年8月5・19・26日

村上祐介（単著）、「教育時事キーワード解説」、『教職研修』2013年4月号～2014年3月号（連載）

〈学会発表〉

Yusuke MURAKAMI, Shifting of Policymaking in Contemporary Japan: from Consensus Democracy to Majoritarian Democracy, Nordic Association for the Study of Contemporary Japanese Society 2014 conference, Helsinki 2014年3月21日

村上祐介、「中央教育審議会における審議の経過と改革の論点」、日本教育行政学会公開研究会集、2014年3月16日

村上祐介、「教育委員会制度改革とガバナンスの課題」、教育関連学会連絡協議会主催・公開シンポジウム、2014年3月15日

村上祐介「教育委員会制度改革のゆくえ」2013年度日本地方自治学会研究会 2013年11月10日

村上祐介、島田桂吾、櫻井直輝、小川正人、本多正人、川上泰彦、橋野晶寛、荒井英治郎、植竹丘、山下絢「教育委員会制度に対する首長・教育長の意識と評価—2013年全国市区町村調査の分析から—」、日本教育行政学会第48回大会、2013年10月12日

村上祐介、「教育政治学の枠組みと学際的融合の在り方」日本教育学会第72回大会ラウンドテーブル（「教育政治学の可能性を探る」）、2013年8月29日

学校教育高度化センター

伊藤秀樹（助教）

〈著書（分担執筆）〉

Eさん・伊藤秀樹、「スタッフのストレスと喜び」ダルク研究会編著（南保輔・平井秀幸責任編集）『ダルクの日々——薬物依存者の生活と人生』、知玄舎、2013、pp. 161-190.

Kさん・伊藤秀樹、「ダルクにいれば安心」ダルク

研究会編著（南保輔・平井秀幸責任編集）『ダルクの日々——薬物依存者の生活と人生』、知玄舎、2013、pp. 315-321.

Mさん・伊藤秀樹、「スイッチを入れるための覚せい剤」ダルク研究会編著（南保輔・平井秀幸責任編集）『ダルクの日々——薬物依存者の生活と人生』、知玄舎、2013、pp. 335-348.

〈雑誌論文〉

伊藤秀樹、「指導の受容と生徒の『志向性』——『課題集中校』の生徒像・学校像を描き直す」『教育社会学研究』第93集、2013、pp. 69-90.

伊藤秀樹、「中卒非進学と社会経済的背景・学業達成・長期欠席——東京都区市町村別データの分析」『Sociology Today』第20号、2013、pp. 1-12.

〈報告書〉

伊藤秀樹・鈴木富美子・元濱奈穂子、「高卒9年目の働き方、親子関係、サポート・ネットワーク——高卒パネル調査wave9の結果から」『東京大学社会科学研究所 パネル調査プロジェクト ディスカッションペーパーシリーズ』No.71、2013、pp. 1-12.

〈学会発表・講演等〉

伊藤秀樹、「『計画された偶然』による進路選択——高等専修学校を事例に」、日本教育社会学会第65回大会、2013年9月、埼玉大学.

伊藤秀樹、「不登校とスクールカースト」、平成25年度子ども・若者を理解するための講演会、2013年12月、神奈川県立青少年センター.

伊藤秀樹、「一歩後ろに下がって、いじめについて考える」、いじめの問題をテーマにしたワークショップ、2013年12月、お茶の水女子大学（学校教育研究部）.

伊藤秀樹、「『実証主義』的フィールドワーカーの憂鬱——表象の危機とどう向き合うか」、関東社会学会2013年度第2回研究例会「自己／語り／物語の社会学・再考」、2014年3月、一橋大学.

海洋教育促進研究室

日置光久（特任教授）

〈著書〉

日置光久（単著）、『自然から学び、科学的に考える21世紀型の理科教育』、大日本図書、2014、総頁数40.

〈雑誌論文〉

日置光久（単著）、「第1回全国海洋教育サミッ

ト」から見えてくる海洋教育の未来」, “Ocean Newsletter” No.331, 2014, pp.2-3.
日置光久（単著）, 「自然から教えられ, 人間から学ぶ」, 『楽しい学校』, 大日本図書, 2013, p.1.

田 口 康 大（特任講師）

〈雑誌論文〉

田口康大（単著）, 「学校教育において「海洋」を学ぶ意義—人間形成的な観点からの考察—」, 『第24回海洋工学シンポジウム講演集』, 日本海洋工学会・日本船舶海洋工学会, 2013, (OES24-30) pp.1-6。